

首里城下町の都市計画とその基本理念

高 橋 誠 一

一 目 次

- 1 はじめに……「首里古地図」と首里城下町の復原
- 2 首里台地と首里城下町の立地
 - (1) 首里台地の地形
 - (2) 首里城下町の地形と屋敷地の立地
- 3 首里城下町の都市計画の実態
 - (1) 首里城下町における多核的プラン
 - (2) 多核的プランと平等と村
 - (3) 首里城下町と沖縄の村落プラン
- 4 首里城下町と風水思想
 - (1) 首里城下町における風水思想の可能性
 - (2) 首里城下町における風水思想の系譜と実態
 - (3) 水田・島の分布と首里城下町
 - (4) 林の分布と首里城下町
 - (5) 急傾斜地の分布と首里城下町
- 5 むすびにかえて……首里城下町の基本理念

1 はじめに……「首里古地図」と首里城下町の復原

琉球王朝の首都であった首里城下町は、那覇市の東部に広がる首里台地の上に立地している。首里城の周辺が都市として大きく改造されたのは、尚真王(1477-1533)の時代であったとされる。この都市が尚真王の時代に一挙に完成したか否かについては不明であるが、いずれにしても、この「城下町」は幕藩体制下の一般の城下町とは異なって、その大部分が土族屋敷によって構成されたものであったという点で、きわめて独自のものであった。もっとも、琉球王国はあくまでも幕藩体制下の日本とは切り離して考えるべきものであるから、この相違はさして異とするにあたらないとも言い得る。したがって、通常使用されている「城下町」という表現そのものも、本来ならば議論すべきであろうが、本稿では、一般的に使われている「首里城下町」という用語を採ることとしたい。¹⁾

いずれにせよ、この城下町の景観を表現したものとしては、1704～1707年頃に作製され、1850

年に再作製されたと推定されるものを1910年に模写した「首里古地図」(東恩納版)の他に、嘉手納宗徳氏によって1968年に作製された「首里古地図」(嘉手納版)²⁾、さらに田名真之氏と吉川博也氏によって1987年に作製された「首里古地図」(田名・吉川版)³⁾が現存している。また、絵図もしくは地図の形式をとるものではないが、福島清氏らによって1998年に製作され、首里杜館に展示されている首里城下町全体に及ぶ復原模型もある⁴⁾。

そこで筆者は前稿で、これらに描かれている首里城下町の現地比定を試みた。具体的には、現地踏査によって現在も残存している城下町当時の道路・街路の分布確認をしたのちに、那覇市役所発行の「1:2500 都市計画図」⁵⁾上に、主として田名・吉川版の「首里古地図」に記載されている道路・地筆界線・河川などを比定・記入していくという方法を採用した。この際、「那覇市旧跡・歴史的地名地図」⁶⁾、「旧首里の歴史・民俗地図」⁷⁾、『首里城周辺史跡マップ』⁸⁾、「戦前の民俗地図」⁹⁾などをも参考にしたわけであるが、その結果、「首里城下町の復原図」と「首里古地図の復原図」を作製することができた。その範囲は、東西約2.7km、南北約1.5kmに及ぶ。この二図には、なお若干の不正確さが含まれているとは考えられるものの、現行の大縮尺図上に復原したという点では、いささかの存在価値がある¹⁰⁾と思っ

ただ前稿では、首里城下町の都市計画や、その基本理念に関する分析を、本格的に成すまでには至らなかった。わずかに、①首里城や首里城下町の建設に際しては、当初から風水思想が強く意識されていた可能性の強いこと、②首里城下町の建設に当たっては、四神相応という意識が存在した可能性も高いこと、③首里城下町は平面的な形態から見ると多核的なプランを有していること、④円形のプランを持つ地区と方形のプランを持つ地区とが混在していること、⑤ごく一部ではあるが周礼型都市という概念も存在した可能性も想定しうることを、などを予察的に推定するにとどまった。そこで、本稿では、前稿の延長線上のものとして、首里城下町の都市計画とその基本理念に関する分析を試みることにしたい。

2 首里台地と首里城下町の立地

(1) 首里台地の地形

首里城下町は、前述したように、いわゆる「首里台地」の上に立地しているが、この地形は、沖縄中南部においては、ごく一般的に見られるものである。当該地域の地形に関しては、すでに目崎茂和・河名俊男・木庭元晴・渡久地健の4氏による地形分類調査があり、詳細な地形分類図(沖縄中南部)も作製されている。以下、それによって首里城下町とその周辺地域の地形の概略を述べてみよう。

沖縄中南部の地形は、比較的均一な地形すなわち低平な丘陵と台地が主体を占める典型的な

低島の地形であるといつてよい。この地域における最高標高は知念台地の糸敷の残丘の193.2mで、その他に与座岳(嶽)168.4m、弁ヶ岳(嶽)165.7m、運玉森158.5mなどの傾動地塊状の台地や分離丘陵と考えられる残丘地形が存在している。首里城下町の建設の際に、その基準として大きな意味を有したと考えられる弁ヶ嶽は、これらの残丘の一つである。

沖縄中南部では、台地・段丘が約40%余を占めている。また台地・段丘とは別種のものとして分類される丘陵部は、数10mの比高をもつ小起伏の波浪状地形を呈していて、同じく約40%を占めているが、台地よりも標高が低いのが大きな特徴となっている。これは台地が第四紀琉球石灰岩でおおわれ、その基底が第三紀島尻層群からなる地質と密接に関連しているからである。すなわち丘陵部の多くは、琉球石灰岩が剥離侵食され、島尻層の泥岩(クチャ)が露出したものであるから、地形的には台地より低く位置するとされている。これらの台地・段丘・丘陵に対して、低地の発達は、山地がないために谷底低地よりも海岸低地が顕著であるが、低地の微地形は一般的に乏しい。

本稿で対象としている首里城下町は、後述するように、その大部分が台地・段丘と丘陵の上に立地しているが、それらの地形を概観すれば以下のようなになる。この地域における段丘はすべて島尻層群を基盤にして、それを覆う琉球石灰岩から構成される。琉球石灰岩は更新世の琉球層群であり、そのほとんどが那覇累層で、その他に読谷石灰岩、牧港石灰岩が局所的に分布している。しかし堆積面と侵食面との関連、カルスト作用による溶食地形の性格、断層などによる地殻変動などによる変位が複合されているゆえに、これらの石灰岩と段丘面の関係は十分には解明されていないとされる。しかし当該地域の段丘に関しては、木元晴氏によって、高位段丘、中位段丘上位面、中位段丘下位面、低位段丘の4段丘群に区別されている。これら琉球石灰岩の海成段丘の基盤は、新第三紀の島尻層群からなるが、その大半はシルト質泥岩であり、一部は砂岩や凝灰岩から構成され、いずれも固結度が弱くて風化や侵食に対してきわめて受食性が高い。被覆している琉球石灰岩が剥離されると、この島尻層群が露出して特異な丘陵地形が呈されるわけであるから、高度的には台地・段丘よりも当然ながら低い位置になるわけで、一般の丘陵・台地との高度関係とは逆になるのが、この地域の特徴である。したがって当該地域においては、丘陵は比高100m以下の小起伏の丘陵地形をなすのが一般的で、孤立状の丘と広い盆状の谷が主要な地形構成となり、日本各地で通常認められる谷密度の大きな丘陵地形とはかなり異質な特性を持っていると考えられている。

地形分類図に示された那覇新港や浦添市の港町3丁目と与那原町を結ぶ断面図でいえば、西部の海岸線から約0.8km付近から標高約20mから50mに及ぶ小起伏丘陵が続き、その東部に標高約50mから約80mの段丘中位面(下位)、さらに標高約80mから約90mの小起伏丘陵

を経て、中位段丘面(上位) (標高約 90m から 120m 程度)、そこから東に向かって下降する小起伏丘陵 (標高約 120m から 75m 程度) と谷底低地 (標高約 75m から 60m 程度)、さらにその部分から東に向かって上昇したのちに東に向かって下降する小起伏丘陵 (標高 60m~145m ~35m)、さらに与那原の海岸に向かって丘陵上を刻む浅谷と海岸低地へと下降していく。

那覇市の中心市街地から続く谷底低地が、北部と南部に分岐して首里城下町の西部の一角を囲み、さらにこの谷底低地は断片的にはあるが、城下町の北部と南部にも見られる。城下町の範囲は、これらの谷底低地よりも高い標高を有しているが、大略的にいえば城下町の範囲のうちで標高の高い部分すなわち中心部は中位段丘上位面にあたり、さらにそれよりはやや低い中位段丘下位面がその西部に続いている。この两段丘面の南部と北部の一部には石灰岩堤が存在している。これらの段丘面の周囲を、小起伏丘陵や丘陵上を刻む浅谷(盆状谷)が取り囲んでいるというわけである¹¹⁾。

(2) 首里城下町の地形と屋敷地の立地

このような地形的条件の上に立地している首里城下町であるから、その範囲は必ずしも平坦な面に広がっているわけではない。沖縄県教育庁文化課の『首里城跡 歓会門・久慶門内側地域の復元整備にかかる遺構調査』中でも、この地形的条件は、以下のように記されているのである¹²⁾。

すなわち、首里は、標高 70~135m 程度の琉球石灰岩台地の上に形成された町であった。町全体が、北に琉球石灰岩丘陵(ニシ森一虎瀬)、南に金城川、東にナゲーラ川、西に真嘉比川と丘陵や川などの自然の障壁によって囲まれ、都城が立地するのに相応しい地形を呈している。首里城はこの首里の南の縁にあって、石灰岩の崖で囲まれた高い所に営まれているので、北の浦添城や、南西の那覇港を望みうるといふ恵まれた立地条件を備えていた。また新第三紀鮮新世の頃に海底に堆積して出来た島尻郡層の泥岩及び砂岩を基盤として、それを覆うように更新世の琉球石灰岩が分布しているため、首里城及びその周辺は湧水が発達している所でもあったとされる。

要するに、首里城下町は、総体的に言えば、平野を見おろしうるきわめて戦略的にも優れた好条件を生かして立地していたわけであるが、必ずしも画一的な平坦地に立地していたとはいえない。そこで、いましてこのことを具体的に検討するために、作製したのが、第1図の「首里台地と首里城下町」である。

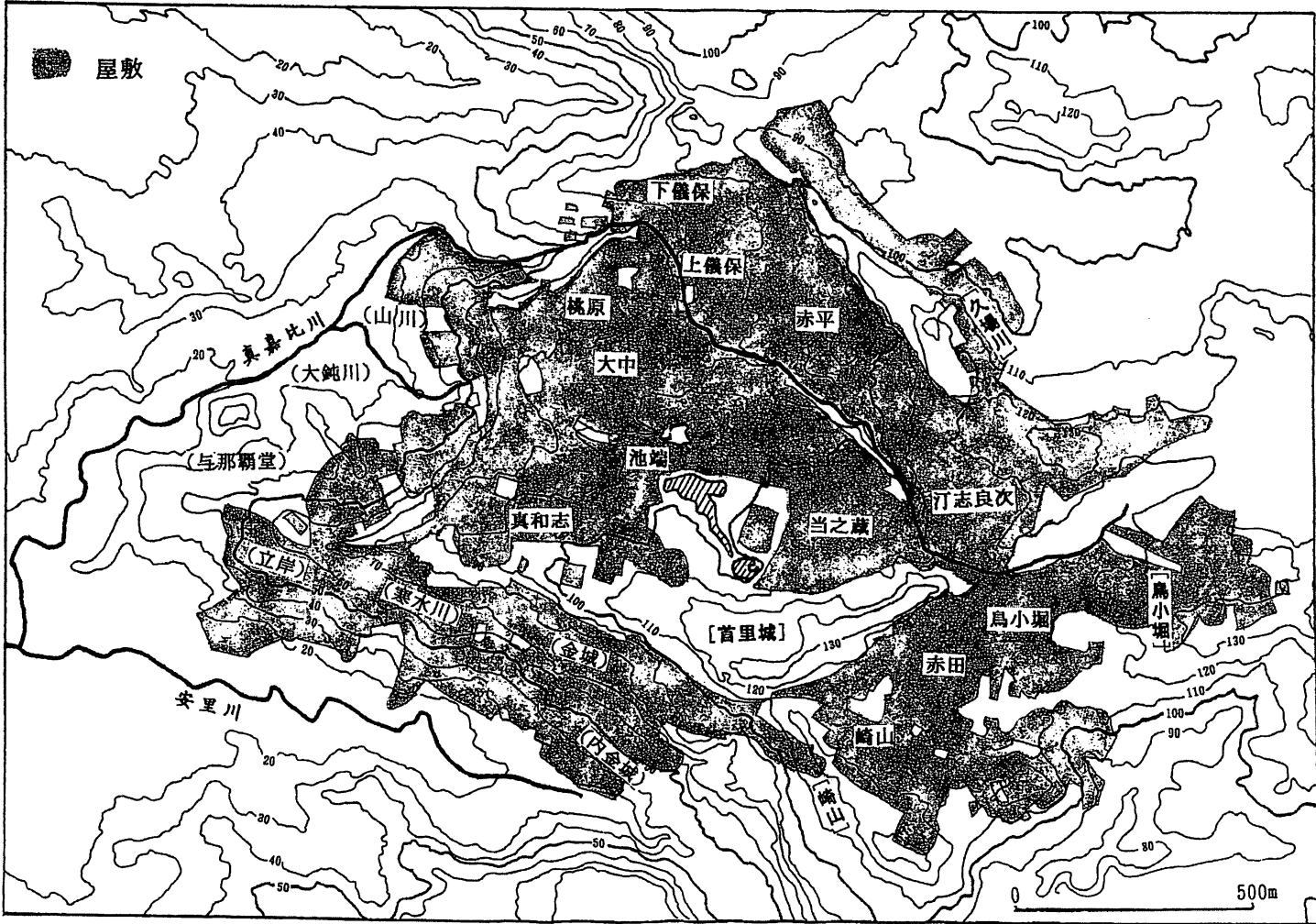
この図は、那覇市発行の「1:2500 都市計画図」¹³⁾に記入されている等高線のうち、10m 間隔の等高線を摘出して示し、かつ前稿で比定した首里城下町における屋敷地を示したものである。

この等高線は現在の状況を示したものであって、第二次世界大戦における大規模な破壊によって、この地域の地形も大きく変えられた。また、例えば大中1丁目の西部などは第二次世界大戦後に石灰岩粉の採掘によって大きく改変されているし、他にも相当の人工的改変がなされている。しかし以下に検討していく首里城下町の都市計画の全体像を把握するには、さしたる障害とはならないであろう。

この図の中に示された等高線は、最低が20m、最高が130mの等高線であるから、標高差は約130mになる。屋敷地も、最も高い地点では標高130m以上、最も低い地点では標高20m以下に見られるから、首里城下町は首里台地の上に立地しているという表現に潜む平坦な都市というイメージは、必ずしも正確なものではない。そして、その標高差と、比較的平坦な地区、傾斜地の地区という点が、首里城下町の都市計画や内部構造を考える場合に大きな意味を持っているように思われるのである。

以下、各地区ごとに、主として旧村名を大体の目安として、その地形や傾斜を検討したい。まず、首里城は、西部と北部は110mの等高線、南部は120mの等高線によって囲まれて、130数mの地点を最高所とする孤立した高所に立地している。その地形は石灰岩の小高い丘である石灰岩堤であって、城の独立性や戦略性の点からも、きわめて理想的な地を選定していることがわかる。この図の中には、同様の石灰岩堤の地形は、崎山村の西南部と鳥小堀村の東端部、さらに久場川村の一部に認められる。これら三地点の石灰岩堤地形は、標高で言えば、120mないし130mの等高線によって囲まれているが、周囲の地よりは一段高くて、ある程度の孤立性を有している。ところが、これら三地点の石灰岩堤地形の部分には、一部に屋敷地は存在しているものの、大略的には屋敷の空白地帯となっている。すなわち先の首里城は別として、ある種の孤立性を持った小高い丘である石灰岩堤は、屋敷地としてではなく、その多くは後述する林であるといつてよい。

これに対して、石灰岩堤よりはやや標高的に低い地は、石灰岩台地の中位段丘上位面であるが、城下町のうちで最もその面積が広く、その大部分は屋敷地となっている。首里城を中心にいえば、その南部の崎山村の一部、東部の赤田村・鳥小堀村、首里城北部の汀志良次村・当之蔵村・赤平村、首里城北西部の池端村・真和志村・大中村・桃原村・上儀保村・下儀保村・山川村の一部が、この中位段丘上位面に立地しているわけである。これらの地区は、総体的には、緩傾斜面であるといえる。すなわち南部の崎山村の一部は、北西の首里城から東南部に緩やかに傾斜しているが、水平距離約500mで10m程度しか下降していない。首里城の東部の赤田村・鳥小堀村も、南東部に向かってやや下降しているが、崎山村と同様にその傾斜は約500mで10m程度であり、また鳥小堀村は一方で東部に向かって上昇しているが、先の石灰岩堤の部分



第1図 首里台地と首里城下町

を除けば、ほぼ平坦といってもよいくらいの緩傾斜地である。一方、首里城北部と北西部の、当之蔵村・池端村・大中村・桃原村の場合は、首里城から北部と北西部に向かって下降しているが、その下降は水平距離 800~900m で 40m 程度であって、先の崎山・赤田・鳥小堀村の緩傾斜よりはやや傾斜しているものの、きわめて緩やかな傾斜面であるといえる。これに対して、首里城西部の真和志村は、約 600m で 40m 程度西に向かって下降していて、やや傾斜が強い。また真嘉比川右岸すなわち東の汀志良次村・赤平村・上儀保村・下儀保村の場合は、南西部の汀志良次村から北西部の上儀保村・下儀保村に向かって下降しているが、約 1100m で 50m 程度の下降で、対岸の当之蔵・大中・桃原村の傾斜と大差はない。

上記の中位段丘上位面に比べて、首里城南西部の内金城村・金城村や首里城西部の寒水川村・立岸村、さらには首里城北西部の山川村の一部と大鈍川村の一部及び与那覇堂村は、小起伏丘陵の谷壁斜面に立地していて、その傾斜はきわめて強い。内金城村・金城村・寒水川村・立岸村に見られる屋敷地は、水平距離約 350m で 70m ほど南に向かって下降しているし、山川村の一部と大鈍川村の一部及び与那覇堂村にある屋敷地は 150m から 200m で 20~30m も西に向かって下降している。

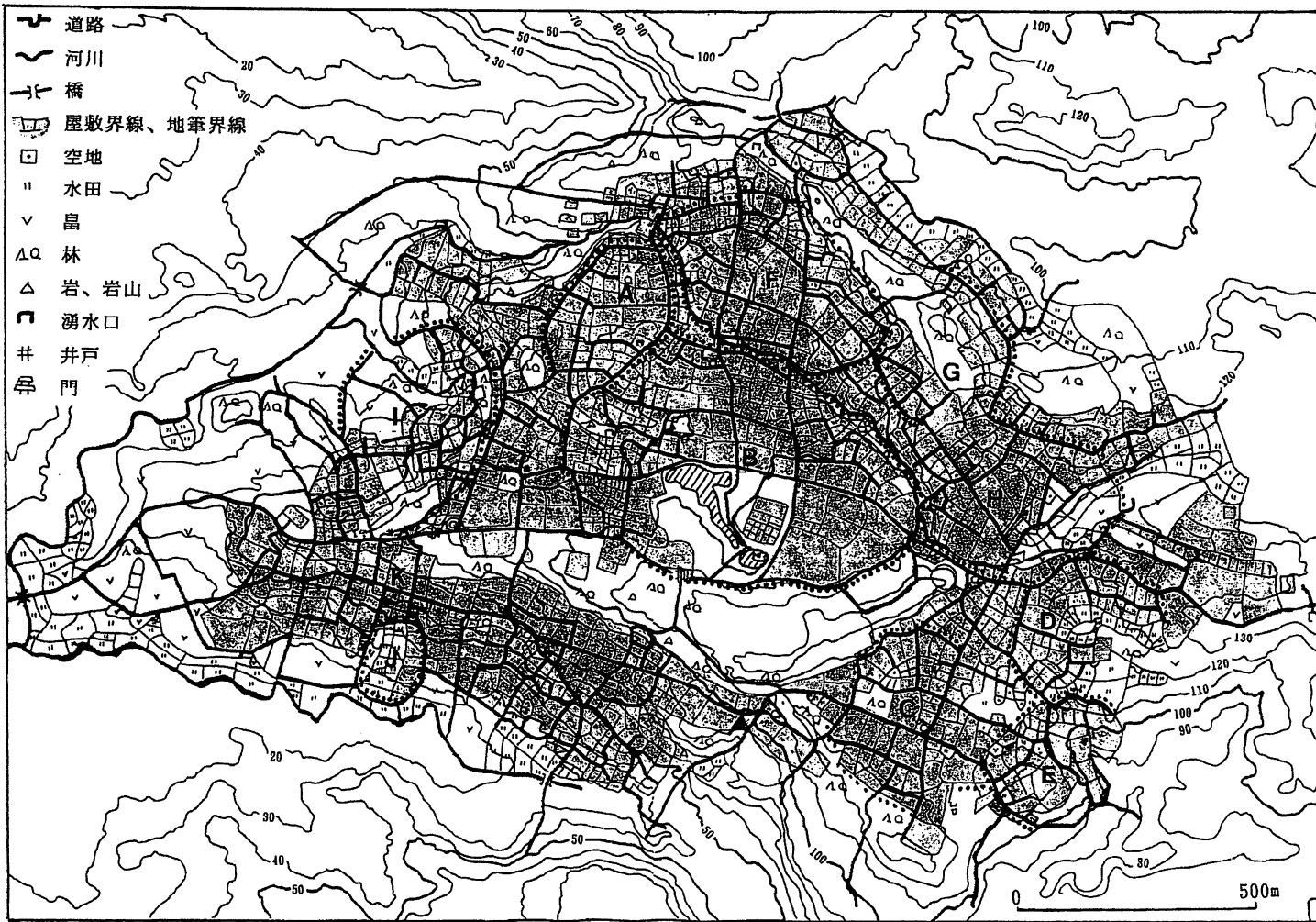
以上、簡単に首里城下町の地形とその傾斜を記したが、首里城と屋敷地の空白地である小高い石灰岩堤、大部分が緩傾斜面である中位段丘上位面の屋敷地、急傾斜地である小起伏丘陵の谷壁斜面の屋敷地という図式が成立しそうである。

3 首里城下町の都市計画の実態

(1) 首里城下町における多核的プラン

首里城下町は、吉川博也氏の指摘されるように、確かに多核的なプランを有している。吉川氏は、御嶽の分布と周辺の地形からして、沖縄の伝統的な集落の存在として位置づけ、複数の集落の連合は、古地図に見られる街路パターンに認められる多核的な都市形態に通じるもので、その多核的な都市構造は石灰岩台地の地形に立地することによる水の分布に由来するというように考えられる¹⁴⁾。

しかしこの多核的都市プランについて、筆者が吉川氏とは若干異なる見解を持っていることは、すでに前稿において、その一部を述べた。すなわち、それはいわば円形と方形との混在であると表現することもできるもので、首里城の西南部の方形プランに対して、その他の多くの地区には、円形プランとでも表現せざるを得ない道路や街区の集合体が存在しており、まさに複数の集落とでも表現し得るものである。ただ、この複合的構造は、吉川氏の指摘のように水の分布に由来するとは一概にはいいきれず、むしろ、地形の起伏によるところが多いのではな



第2図 首里城下町における多核的プラン

いか、また、円形のプランに中国の影響を想定することも可能性としてはあるかもしれないということ、また一方では、周礼型都市という概念が意識された可能性があることにもふれた。要するに、首里城の北部に認められる大きな円形の地区には重要な施設や龍潭が存在し、これに加えて最も重要な中心としての首里城をあわせた地区が、都城の中心に位置し、それを取り巻いて都市が建設されている状況、また玉陵や首里城の諸施設の分布状況、一部に認められる直交状街路などに、周礼型都市を彷彿とさせる様相が認められることも推定した。

そこで、これらのことに関して検討するために作製したのが、第2図である。この図は、那覇市発行の「1:2500 都市計画図」から作製した10mごとの等高線の図と、前稿で示した「首里古地図の復原図」を組み合わせたものである。首里城自体が東西にやや長い楕円形であることは周知のことであり、これは前章で述べたように石灰岩堤の形態が、相当の意味を持っているように思われるが、これ以外にも円形や楕円形の形態が多く認められるのである。そこで首里城下町のうちで、円形プランと想定できる例を摘出すれば、図中に点線で示したようなA～Jが浮かび上がってくる。前章で見たように、このうちのGは石灰岩堤、IとJは小起伏丘陵谷壁斜面、その他は中位段丘上位面ということになる。各々の「円形」について、簡単に述べれば、以下のようになる。

A地区 首里桃原町(桃原村)に加えて、首里大中町(大中村)のごく一部にも広がる南北約380m、東西約280mの南北に長い楕円形が認められる。首里桃原町は、御殿・殿内などの屋敷が並んでいた地区である。標高90mから70mのほぼ平坦な面に位置しているが、北部と北西部は70mと60mの等高線が接して急傾斜地となっており、また東部の北半部は真嘉比川に沿って70mの等高線が南に切り込んでいて、この地区の楕円形の基となっているように考えられる。

B地区 首里大中町(大中村)と首里当之蔵町(当之蔵村)、そして首里池端町(池端村)と首里真和志町(真和志村)の一部に広がる最も大きな南北約520m、東西約760mの東西に長い楕円形がある。首里当之蔵町には臨濟宗円覚寺や諸按司屋敷など、首里池端町は龍潭から流れ出る水路に沿って細長ののび、天山森の中腹に第二尚氏の陵墓である玉陵と構造が類似した尚巴志王の墓と伝承される古墓があり、首里真和志町は中城御殿などの屋敷や園比屋武御嶽などがあって、首里城下町の中でも中心的な施設が多く存在していた。首里大中町1丁目の西部は第二次世界大戦後、多くの石灰岩粉が採掘されたために地形が大きく改変されて窪地になっているが、標高110mから90m弱のほぼ平坦な面に広がっている。北東部の真嘉比川に沿って、80, 90, 100mの等高線が南西に向かって切り込んでおり、また南部は首里城の立地する石灰岩堤によってやや曲線をなして、この地区の楕円形の依拠するところとなっているように思

われる。

C地区 首里崎山町（崎山村）と首里赤田町（赤田村）のそれぞれ一部ずつに広がる南北約380m、東西約520mのやや東西に長い楕円形が見られる。首里赤田町は首里台地の南東部にあたり、円覚寺の末寺の西来院や首里城の継世門（赤田門）があった。また首里崎山町には首里拝みの遥拝所として知られる崎山御嶽があり、境内には中山王察度の子の墓といわれる拝所や崎山樋川、東苑とも御茶屋御殿ともいわれる旧王家の別邸があった。標高120mから110mの平坦面に広がっているが、この地区の楕円形は、120mと130mの等高線で示される南西部の石灰岩堤と南東部における110mの等高線北側への彎曲に拠っていると考えられる。

D地区 首里鳥堀町（鳥小堀村）の西部に、南北約310m、東西約330mのほぼ完円形が認められる。首里鳥堀町には東部に市の最高峰で古来靈峰とされる弁ヶ嶽が存在しているが、この円形とは直接的には関連していない。標高120mから110mのほぼ平坦面に位置しているが、北部の真嘉比川と東部の石灰岩堤などがこの円形の境界となっているようにみられる。しかし、このD地区の円形は、円形の中央部に環状の水田帯などを含んでおり、A～Cなどとはやや異なっていると考えたい。いわば首里城下町の外縁部の彎曲に由来している可能性も強く、この点からいえば後述のI地区に類似しているとも思われる。

E地区 首里崎山町（崎山村）、首里赤田町（赤田村）、首里鳥堀町（鳥小堀村）のそれぞれを一部取り込んだ南北約280m、東西約280mのほぼ完円形なもので、先のD地区と同様に首里城下町の外縁部ではあるものの、ほとんどが屋敷地によって形成されているという点で異なっている。北部の110mの等高線の北部への彎曲と、西南部の等高線120mによる孤立的の微高地によって、この円形が画されているように思われる。

F地区 首里儀保町（下儀保村・上儀保村）と首里赤平町（赤平村）の一部の南北約380m、東西約520mの東西に長い楕円形が認められる。首里儀保町は真嘉比川の右岸にあたり、西森の南の窪地に位置しているが、上儀保には士族屋敷が多く、儀保大道を中心に小路が四方に伸びていた。また、首里赤平町には、王子の御殿や蔡温の屋敷をはじめとする諸家屋敷が並んでいた。首里赤平町2丁目の東端の小丘陵は虎瀬山と呼ばれ、かつて丘陵下に石虎山天慶院があったことから石虎山、また、虎の頭に擬して虎頭山とも呼ばれた。昔は老松の茂る丘で、詩歌に詠まれることも多く、首里城下町の風水や四神を考える上で重要な意味を持っているといわれている。この地区の楕円形は、南東部が約90m、北西部が約70mの標高で、北西に向かって緩やかに下降している。この楕円形の南部と西部は真嘉比川の彎曲に拠っていると考えられるし、南部と東部は、南東部から東部さらに北部に伸びる90mの等高線によって示される南東部から北西方向に向かって伸びている小高い丘（その核心部が石灰岩堤）に拠っているように考

えられる。

G地区 首里久場川町（久場川村）の北部を中心に、一部は首里赤平町（赤平村）と首里汀良町（汀志良次村）にかかる地区に、南北約380m、東西約310mのほぼ円形が見られる。首里久場川町は、虎瀬山の北斜面に北西から南東に伸びており、戦前までは緑地地帯で防風林や水源の役目を果たしていたといわれ、万暦45年（1617）に設立された平等所もあった。100mあるいは110mの等高線によって囲まれている小高い丘を中心とする円形で、先述の石灰岩堤を取り囲む円形でもある。したがって、大部分が屋敷地によって形成されているA、B、C、E、F、H地区とは異なって、その中心部には林が存在していて、円形プランと考えることは不適当かもしれない。

H地区 首里汀良町（汀志良次村）を中心に、首里久場川町（久場川村）の一部を含めて南北約380m、東西約450mのやや東西に長い楕円形が認められる。首里汀良町には古い御嶽もあり、また2丁目の首里中学校はかつて琉球神道における神女組織の最高位の聞得大君が住んだ聞得大君御殿があった地でもあった。標高130mから110m程度の緩傾斜地に広がっているが、その南と西は真嘉比川の彎曲によって画されている。また東部と北部は東から西に伸びている丘（すなわち120mの等高線によって囲まれていて、130m以上の場所も見られる丘）に拠っているように考えられる。

I地区 首里山川町（山川村）などの傾斜地に、南北約480m、東西約350mのやや南北に長い楕円形が見られる。標高70mから20数mの急傾斜地で、特に70mと60mの等高線の彎曲に沿ってこの楕円形の北・東・南が画されている。しかし、この楕円形は、首里城下町の周縁部であり、かつ水田・林などを含んでいて、A、B、C、E、F、H地区と同類のものとは考えられない。

J地区 首里寒川町（寒水川村）に見られる南北約190m、東西約140mの小さな楕円形で、標高50mから10数mの急傾斜地にある。この部分も等高線の状況から見れば、やや北に向かって入り込んでいて、この等高線の彎曲に従って小楕円形が生じたと推定できる。しかし、この小楕円形も屋敷地はごく一部で、その大部分は水田と畠であるから、A、B、C、E、F、H地区の円形・楕円形とは区別するべきであろう。

K地区 以上、首里城下町において認められる円形（楕円形も含んで円形と表現）を示したが、これに対して、首里寒川町と首里金城町には、方形と表現できる地割が存在している。図中にKで示しているのがその地区で、旧村名でいえば、立岸村、寒水川村、金城村、内金城村の、小起伏丘陵の谷壁斜面の地割の一部がそれである。いずれも首里城の西部・西南部・南部の標高100mないし80mから標高30mないし10数mという、70mほどの落差のある急傾斜

地で、特に、首里金城町2・3丁目の境を南北に走る古い石畳の坂道は、首里城正門右の石門から識名を経て沖縄本島南部に通じる真珠道で築造は16世紀に溯るといわれ、この坂の東側3丁目にある内金城御嶽(東西の大嶽と小嶽に分かれ、御嶽の境内に国天然記念物の大アカギ)などとともに首里城下町の歴史的景観のシンボルともなっている。首里城の南から西北西に向かって通じている道路が、この方形の主軸を成しているようで、断片的ではあるが、先に見た円形のプランとは明らかに異なる様相を呈している。¹⁵⁾

首里城下町においては、他に円形と方形のいずれとも決しがたい地割も存在しているが、大局的には、A、B、C、E、F、H地区の円形もしくは楕円形の屋敷地、D地区、G地区とI地区の円形もしくは楕円形ではあるが、全体が屋敷地ではなく、首里城下町の縁辺部でその内部に水田や林を含んでいる地区、K地区のような方形の三種類に分類できると言って大過はないであろう。

それでは、これらの円形と方形は、何に拠ったものであろうか。先に見たように、円形もしくは楕円形のほとんどは、前稿でも述べたように、地形的条件によって生じたものと考えたい。円形のうちで、G地区は石灰岩堤の小高い丘によってその楕円形が形成されているようであるし、またI地区は小起伏丘陵の谷壁斜面でその地形的条件は違うが、やはり中位段丘上位面と小起伏丘陵の谷壁斜面との境界付近の彎曲部が、その形態を決定しているように思われる。またA、B、C、E、F、Hの各地区は、中位段丘上位面の比較的平坦な地形の上に展開しているが、いずれも河川の流路や、やや狭まった間隔の等高線の曲線、あるいは石灰岩堤などの丘の彎曲部が、円形ないし楕円形の円弧と重複しているわけで、各々の多核的プランの主たる成因は地形的な単元に帰してよいように考えられる。

K地区の方形も、やはり地形的条件にその要因が求められることは同様である。K地区の場合、先に述べたやや斜行する東西道路が基本となっているように思われるが、この道路は首里城の南では標高約100m、そこから約1.2kmほどを西に緩やかに下降しながら標高約50mの地点に達している。この傾斜は、中位段丘上位面の傾斜に比べればやや強いというもの、首里城下町から那覇へ向けて下降するという地形を考えれば、むしろ平坦を志向しているといつてよい。この道路の南北には急傾斜地が東西に続いているが、そこには多くの屋敷が集中している。したがって各屋敷からこのメインルートのな東西道路に通じるには、南からは直線的に登る、逆に北からは直線的に下る道路が最も効率的で短絡的であるということになる。この地区の南北の道路は前稿でも現地調査によって確認したように、多くは階段状の道路であり、また接している屋敷地も階段状に整地されている。それ故、歩行の容易さを意図してできるだけ等高線に沿って斜めに上り下りする道路より、多少の傾斜はあるものの短距離を志向したと考

えられる。首里城下町時代における石畳の道路のうちで現存しているのはこの地区のみであるが、この石畳の道路もまたこの地区の急傾斜によるものであろう。したがって、小起伏丘陵の谷壁斜面に造られたこれらの方形は、ある意味では必然であったということになる。換言すれば、この急傾斜地においては、円形のプランを造成することは、不可能とは言えないまでもきわめて困難なことであったと解したい。

首里城西南部のK地区と同様に、小起伏丘陵の谷壁斜面に位置しているI地区の場合は、円形プランに属しているが、この地区は先述のように首里城下町外縁部の彎曲と地形によって方形とはなり得なかった。またD地区とG地区の場合も、その基盤となっている地形こそ違え、I地区と同じようにその円形の由来を考えることができる。

それでは、中位段丘上位面に見られるA、B、C、E、F、H各地区の円形ないし楕円形は、何に拠って生じたものであろうか。先に記したように、その主たる要因は、地形的單元、換言すればひとつのユニットを形成している平坦面であることは、まず間違いない。しかし、地形的な要因のみでその円形や楕円形が決定されたとは、実は考えがたい。すなわち、如何に地形的單元が認められるとはいっても、大きく言えば、この地域は中位段丘上位面としてのいわば平坦面であるということもまた事実なのである。

ということは、この大きく言えば平坦面である中位段丘上位面においては、円形のプランを造ることも、方形のプランを造ることも、ともに可能であった。この平坦面が仮に狭小な円形もしくは楕円形であったとすれば、必然的にその上に展開する地割は円形あるいは楕円形にならざるを得ないが、ここで対象としている平坦面は、東西・南北ともに1.5km程度の広がりをも有している。したがって、この地形面に、例えば古代日本において造成された条里地割や条坊地割、あるいは幕藩体制下の多くの城下町に見られるような方形の街区を造ることは十分に可能であった。にもかかわらず、方形は造られなかった。それゆえ、地形的單元もしくは個々の中小の平坦面がその重要な要因となったことは確実であるとしても、やはり円形を志向するという原理が存在した可能性は強いと考えたい。

とすれば、この円形志向は何に由来するものなのであろうか。前稿で述べたように、中国の影響、例えば福州の都市形態の影響などを想定し得ることも可能性としてはある。ただ、確たる証拠を提示できるわけではないが、風水思想が大きな意味を持っていることも十分に考えられる。周知のように沖縄においては、T字路の突き当たりの「石敢当」やある階層以上の屋敷の正面入口を遮るヒンプン（目隠し塀、前垣）が存在している。これらについては多様な解釈がされてはいるが、基本的には、直進する悪霊を排除するためのものであったとあって大過ないであろう。その観点からすれば、方形よりも円形の方が、はるかに悪霊排除すなわち直進の

阻害と、良い「気」の流出を防止するという目的に適っているといえる。首里城下町において、長距離を見通し得る街路がほとんど存在しないという事実は、幕藩体制下の城下町における軍事的目的による「遠見遮断」とは、異なったものとして考えるべきであろうし、円形の意味も、あるいはこの風水思想に帰することができるかもしれない。

(2) 多核的プランと平等と村

上記のような首里城下町の多核的プランは、首里城下町に設定された行政的な村や三つの平等と、どのような関係を有していたのであろうか。以下、この点について検証してみたい。

琉球時代の王府首里は「三平等」という三つの区域に分けられていた。南風之平等・真和志之平等・西(北)之平等がそれである。西(北)之平等と南風之平等は真嘉比川で区分され、南風之平等と真和志之平等は、龍潭から流れ出た疎水と尾根によって分けられていた。

南風之平等は、首里台地のほぼ中心部にあたり、真嘉比川の東に設定された西(北)之平等と、首里城下町西部の真和志之平等に挟まれた地域である。首里城から見て南側を意味しているが、首里城の諸門のうちで南に向いている継世門(赤田門)は、当初は首里城の第一門であったとも言われている。この門の南側がすなわち南風之平等と称されたわけで、この門の前でできた町(赤田・崎山)が核となって、その後、鳥小堀・当之蔵・大中・桃原を取り込んでいったと考えられている。このうちで赤田村・崎山村・鳥小堀村が当初の中心地であったことは、この三村を首里三箇と称したことから明らかで、その後の首里の発展によって北西側の桃原村までを取り込んでいったというのが通説である。したがって南風之平等は鳥小堀・崎山・赤田・当之蔵・大中・桃原の6村の範囲に広がっていた。現在の町名で言えば首里鳥堀町・首里崎山町・首里赤田町・首里当蔵町・首里大中町・首里桃原町ということになる。この中でも首里城の北側の当之蔵は、首里の中心部に位置し、多くの寺院が集まっていた。また北西側の大中・桃原は典型的な屋敷町で御殿や殿内など高級士族の屋敷が集中していた。南風之平等には三平等殿内の一つである「首里殿内」があり、「首里あむしられ(阿武志良礼)」と呼ばれる神女が居住していた。三平等と同様に神女組織も三つに分けられていたわけであるが、その一つが南風之平等を支配する首里殿内であった。尚真王時代に首里に集められた按司のうち、中山系(中頭郡諸間切)が分住した地域であると推定されている。

次に、西(北)之平等は、首里城の西側という意味ではなく、城の北側の平等を指している。これは沖縄の方言で北のことをニシと呼ぶことから当て字としての西が採用されているわけで、本来ならば北之平等と称すべき地域名称である。古くは、王府が直接治める西原間切(現在の西原町)をも含む広い地域であったが、そのうちの首里台地の部分を西之平等と呼ぶようにな

ったといわれている。汀志良次・赤平・上儀保・下儀保・久場川の5村から成っていたが、現在の町名では、首里汀良町（汀志良次村）・首里赤平町（赤平村）・首里儀保町（上儀保村・下儀保村）・首里久場川町（久場川村）にあたり、山北系（国頭郡諸間切）が集住したとされる。西森や虎瀬山などの丘は、首里城下町を守る地形であるとされているが、その麓に広がっており、三平等殿内全体を支配する聞得大君御殿、久場川の御殿や平等所、蔡温や玉城朝薫の屋敷をはじめ高級士族の屋敷が多く集まっていた。さらには平良市や汀志良次市などの市場も立地し、繁華な地域であったといわれる。

真和志之平等の語源はさだかではないが、首里城の南側から西側にかけての斜面に広がった地域にあたり、首里城正殿の向きが南側から西側が変わって歓会門や綾門大道が整備されたころから発展してきたのではないかとされる。真和志・町端・山川・大鈍川・与那覇堂・立岸・金城・内金城・寒水川の各村によって構成されていたが、現在の町名で言えば、首里真和志町（真和志村）・首里池端町（町端村）・首里山川町（山川村・大鈍川村・与那覇堂村・立岸村）・首里金城町（金城村・内金城村）・首里寒水川町（寒水川村）ということになる。山南系（島尻郡諸間切）¹⁶⁾の集住した地域と推定されている。

これらの三平等の起源は、明確ではない。一般的には、17世紀半ばに始見されるといわれ、17世紀の半ばに従来の三間切を整理して、三平等に分治するようになったというのが通説である。残念ながら本稿で、三平等の起源について具体的に議論できる段階には至っていない。しかし、これら三平等の設定とその変遷、たとえば上述のような南風之平等が当初は赤田村、崎山村、鳥小堀村の首里三箇からはじまって次第に北部を取り込んでいったというのが、事実であるのか否かというようなことを含めての詳細な検証は、きわめて重要なことのように思われる。

というのは、先に見た多核的なプランと、この三平等との関係については、検討すべき問題が多く認められるのである。先に示したF地区、G地区、H地区は、西（北）之平等に属しているが、この平等は真嘉比川の右岸に独立して存在しているので、さしたる問題とはならない。しかし、真嘉比川のような明確な境界線で区分されていない南風之平等と真和志之平等の場合、その平等の設定の時期が、重要な問題となる。なぜならば、A地区とB地区の円形のユニットが両平等によって分断されているからである。このことは平等だけではなく、旧村域についても指摘することができる。要するに、平等や村が、首里城下町の建設・整備当時から画然たる行政地域として存在していたとすれば、このような独立した区画と思われる地区を分断するという状況は考えにくい。むしろその当時の行政地域に応じて、独立したユニットが設けられるべきである。首里城下町の本格的な建設や整備は、尚真王の時代であったといわれるが、この

際には按司の首里への分住・集居策が相当程度に実施されたであろう。したがって、首里城下町の骨格は、この頃にはすでに形成されており、それゆえ首里城下町において見られる多核的な街路や街区も、かなりの地区で顕在化していたと思われる。とすれば、都市景観としての多核構造は、かなり早い時期に実現しており、その後に平等や村が行政的な枠として設定されていった、もしくは改めて線引きされたと推定するのが妥当であるかもしれない。もっとも、この推定は十分な史料の分析が必要であり、性急に過ぎるとの謗りを免れ得ないであろう。各地区ごとの形成年代や按司その他の居住の時期とその実態を分析することによって、かかる問題が解明されると思われる。

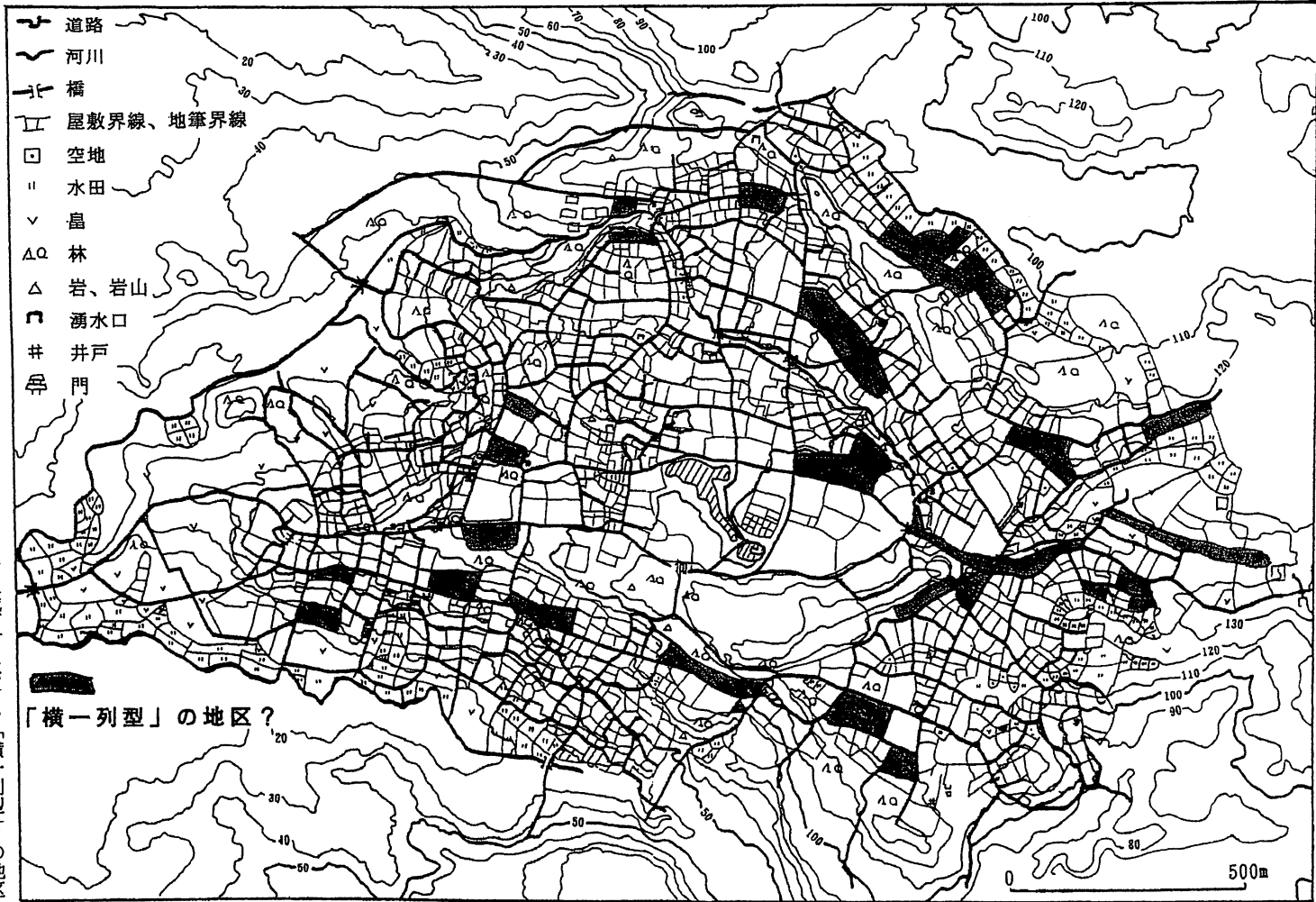
(3) 首里城下町と沖縄の村落プラン

次に、首里城下町の街区内部の個々の宅地割についても、若干の検討をしておきたい。ただ本稿では、首里城下町全体のプランを主たる対象としているから、この節では、予察的な段階にとどまらざるを得ない。しかし突き詰めていけば、この種の考察も首里城下町の建設年代や内部構造の解明に関して、大きな鍵となるように思われるからである。

というのは、沖縄の集落についての、坂本磐雄氏の示唆に富む研究がある。坂本氏は、沖縄の集落には、①集居集落の割合が著しく高いこと、②集居集落の中では道路配置および宅地割が規則性をもつ、計画的に設置されたものがかなり多いこと、③上記の計画的集落の宅地割のほとんどは、「横一列型」と名付けられること、の3点を特徴としてあげておられる。

すなわち①については、農村集落を散在・散居・集居・密居の4タイプに分けた場合、沖縄では集居の割合が実に84.6%にも達して、日本全国における集居の割合を30%近くも上回っている。また②については、沖縄の農村集落465箇所のうち、道路配置および宅地割の規則性が、集落区域内の半分以上を占めるものは230にものほり、かつ県内全域に分布しており、このような特徴は他の県では全く見られない。このことは、首里城下町の建設に際して、琉球の各地からの移住が大きな要素を成しているという事実と、先に述べた首里城下町における多核的プランの背後に旧来の村落の複合体という可能性も想定しうることを合わせて考慮に入れれば、無視できない重要性を持っているように思われる。

なかでも注目すべきは、③の計画的集落は、宅地割形態の相違のうち特に住宅の向きを基準とすれば、「横一列型」・「横二列型」・「縦一列型」・「縦二列型」・「田の字型」・「一区画型」の6タイプに分けられ、この中で「横一列型」に属するものが、230集落のうち215集落の95%も占めているということである。この「横一列型」の普及の要因は、坂本氏によれば、門の位置と住宅の表座側を互に向かい合うようにすることの欲求、要するに正面入り志向が強いこと



第3図 首里城下町における「横一列型」の地区

に求められる。すなわち住宅の向きの方位は、沖縄では台風シーズンおよび冬の主風向と地形条件で決まるが、その向きに対して全敷地で正面側に門の設置が可能な宅地は、「横一列型」以外にはないからである。

それでは、「横一列型」の採用時期は、いつごろのことであろうか。この点に関して、坂本氏は、『球陽』に集落の創建や移転についての時期の記載のあるうちで、現集落において部分的でも規則的宅地割が認められる 35 集落を分析された。さらにそのうちで基本的宅地割が集落全域に及ぶものに注目し、その最初の集落として、1736 年に現在地に移転してきた沖縄本島の玉城村前川をあげておられる。この集落の宅地割を分析すると、不規則な部分は 1736 年につくられているが、その他の規則的な部分は 1737 年以降につくられていることが仲松弥秀氏の研究によっても確認されており、したがって、沖縄における「横一列型」だけから成る最初の集落は、1737 年に造成された玉城村前川であると結論づけられている。これに対して、規則的宅地割が非全域の場合は、さきの 35 の対象集落のうち 1648～1736 年までに形成されたものが 5 集落あり、「横一列型」の他に「田の字型」や「横二列型」なども含まれている。沖縄県立図書館に保存されている 1736 年以前の集落宅地割図として唯一のものである現那覇市久茂地の集落図によれば、ほとんどの宅地は自然発生的ではなく計画的に造成されていることがわかり、「田の字型」をはじめとして一列型や二列型などのさまざまなタイプが混在しているとの指摘もなされているのである。¹⁷⁾

坂本氏の研究対象は、いわゆる村落レベルの集落であって、首里城下町にそのまま適用できるものでないことは、改めて断るまでもない。しかし、敢えてこの観点から、首里城下町を見れば、実は興味深い事実を指摘できる。というのは、首里城下町においても「横一列型」のブロックが存在しているということである。第 3 図「首里城下町における「横一列型」? の地区」に示した地区は、そのブロックが北側（もしくは北寄り）と南側（南寄り）の道路によって挟まれているか、あるいはその片側または両側が林か農地に挟まれていて、一列の屋敷しか存在しないものである。また、このいわば「横一列型」以外にも、「縦一列型」や「横二列型」あるいは「田の字型」などと考えられる様々な街区が認められる。これらの混在は、首里城下町の建設年代を考える上で、重要な鍵になるかもしれない。「横一列型」のみで構成されてはいない集落は 1736 年以前の成立になるという坂本氏の見解が、首里城下町においても適用できるのか否かの検討が必要となってくるのである。また、ここで示したいわば「横一列型」が首里城下町の中心部ではなく、前章で述べた中位段丘上位面の周縁部に顕著に認められることも、あるいは何らかの意味を有しているのかもしれない。例えば、沖縄の村落のうちで新しく造られていく計画的な村落の多くが「横一列型」として統一されていく流れと符合して、首里城下町

もその外縁部への拡大を遂げていく際に、「横一列型」を採用したのではないかというような想定も可能かもしれない。もちろん先述のように、このことは、あくまでもごく粗い予察でしかなく、この点に関しての詳細な検討は後日を期したいと思う。

4 首里城下町と風水思想

(1) 首里城下町における風水思想の可能性

首里城下町の構造について、吉川博也氏の貴重な研究があることは、すでに述べた。氏は、「聖なる首里と俗なる那覇」という分別は、単に政治・宗教と港湾・貿易という機能的分担関係を超越するものであったとし、首里城はまさに「小宇宙としての首里城」と位置づけられるべきものであるとした。また、玄武としての弁ヶ嶽、青龍としての雨乞嶽もしくはその付近の急崖や河川、白虎としての虎頭山、朱雀としての那覇を想定し、その後の整備によって首里城は風水思想にもとづいて作られはしなかったかもしれないが、少なくともそれによって読みかえられた、つまり同じ世界を風水思想という他の文脈に読みかえることによって、新しい輝きを持つ断面を誘発することができる¹⁸⁾と論述している。

首里城研究グループもまた、首里城と首里城下町を風水思想の関係において述べていることも前稿で略述したが、これについては改めて後述することとしたい。

筆者もまた、吉川氏や首里城研究グループと同様に、首里城や首里城下町において風水思想が強く意識されていたと考えるが、ただ吉川氏による「首里城は風水思想にもとづいて作られはしなかったかもしれないが、それによっていわば読みかえられたのである。」という考えとは若干異なって、当初から風水思想が強く意識されていたという積極的な意味を想定した。

今一度、重複してその概要を記せば、以下のごとくである。すなわち、末吉東南方の100m等高線に囲まれた小丘と50m等高線に囲まれた高津嘉山を結ぶ直線と、弁ヶ嶽と波上宮を結ぶ直線が、首里城・龍潭池・玉陵などのいずれも人工的構築物の集中する首里城下町中心部で交わっているという事実は、無視し得ない重要性を持っていると考えられる。また、首里城下町の建設に当たって、四神相応という意識が存在した可能性も高いのではないか。中でも玄武としての弁ヶ嶽、朱雀としての波上宮と周辺¹⁹⁾の海と低地は蓋然性がかなり高いように思われ、末吉東南方の小丘と高津嘉山については、この両者よりも可能性としてはやや弱いものの、一応は白虎と青龍というように想定した。四神については、弁ヶ嶽、雨乞嶽と急崖・河川、虎頭山、那覇という考え方もあるが、筆者が想定する四神が正しいとすれば、東を上位とする琉球の方位観によって、通常の四神配置とは方角の点で90度時計回りの方角に転じた四神の配置が意識されていたということになる。いずれにせよ、前稿では「首里城下町の北部と南部を取り囲

んで西方に流れる河川は、ともに玄武である聖地の弁ヶ嶽から流れ下っている。このような状況は、四神相応の地で風水思想にもかない、まさに気の集中する地点に王城と主要施設が置かれたことを物語っているのではあるまいか。」というように考えたわけである。ただこれに関する前稿の考察は、表相的かつ予察的な段階を脱することはできなかった。そこで、本稿では、以下に述べるように、沖縄と首里に関する既往の研究に立ち戻って考え、首里城下町の諸景観要素を検証することによって、若干の修正を試みたい。

(2) 首里城下町における風水思想の系譜と実態

目崎茂和氏によれば、琉球には本来的には「風土」という表現がなかったという。それは、まさに「風水」という言葉でもって表現されるべきものであり、沖縄だけではなく、もっと広い東アジア世界にも及ぶ問題であると位置付けられている。¹⁹⁾

このような琉球における風水についての研究は数多いが、島尻勝太郎氏によれば、風水思想が沖縄に伝わったのは、『琉球国由来記』によれば、康熙6年(1667)に周国俊国吉通事が、存留通事として中国へ渡り、福建で学んで帰ったのが始であるというが、『球陽』では尚賢王3年(1650)の条に「唐榮地理記」が載せられていて唐榮人が古くから風水思想を学んでいた事が示されているとする。またその50数年後に蔡温が風水について書いていることは『球陽』に記されている通りであり、琉球では江西学派ではなく、特に方位を重視する福建学派の風水が隆盛をきわめていたとされる。

蔡温と毛文哲の首里城を相する文によれば、首里城は狭窄で高低もあるが、「竜の来歴」や「気脈の鐘まる所」としてはみるべきものがあるという。首里城は沖縄本島の脊稜をなす丘陵の南端に東西にのびる高台につくられた都城で、その高台は東に起こり、西に低い。この上に西面して建てられているわけで、しかも首里城正殿は丘陵の方向と一致して西に面しており、北殿・南殿は南北向し、正殿から歓会門までは一直線ではなく左廻右転しているのも法にかなっているとされる。これは気が漏れることを防いでいるわけで、歓会門から那覇に下る途中の中山門にあったといわれるチンマーサーはヒンブンの役割を果たしていたのではないかと島尻氏は言う。また馬齒山(慶良間)は城前にあって城の錦屏となって気の漏れるのを防いでいるし、城の左方の小椽と豊見城の諸峰は青龍、右方の北谷や読谷山の諸峰は白虎として城都を守っている。本来、東西南北の守護神はそれぞれ、青龍、白虎、朱雀、玄武であるが、首里城は西面しているので、城の左の南と右の北を風水説の左青龍右白虎としていると考えられている。また那覇港、泊港、安謝港は吉方であるとされる。さらに首里城の風水の留意点として、第一に以上の三江は國の血脈であるので三江とこれに注いでいる河川は破壊することなく保全・整備し

て活力を加えるべきであるとされ、また第二に弁ヶ嶽、虎瀬、崎山嶽は松林によって城を守っているものであるから時に応じて栽植して整備すべきこと、第三に城間地方から泊地方に至るまではもっと多く松を植林して漏洩の気を遮るべきであると強調されてきたことが述べられている。²⁰⁾

先に見た首里城研究グループも、宰相蔡温が中国の福州に留学し、「風水」を学んで帰ったのは、1708年以降のことで、1713年に彼は首里城や玉陵などの「風水」について、「恭しく玉陵を觀るに、国都の高処に発祖し、最も好し。城中に竜泉あり、味美にして且清し。即ち玉陵の地性、亦知るべし。虎瀬より末吉に至る一連の山林、隠々として穴を護り、且、穴前平坦なり。及び其の外を望めば、即ち万家の地、廣大潤寛にして、万馬を容るるに足り、最も好し。但其の竜身、乙より辛に走り、硬直して延蟠する無く、平坦にして高低無し。而して、砂穴を護る者無し。下より之を觀れば、即ち風吹き、露打ちて、風を蔽し、気を納るること能はざるが若し。予想ふに、穴後並びに左右、深く樹木を栽し、緊固密衛し、穴をして気を泄らさざらしむること最要なり、蓋し玉陵の奇形は、俗眼の及ぶ所に非ず。今暫く其の略を記して、以て君子を俟つ。」(球陽)というように語っていることを挙げ、首里城は、優れた「風水」の立地にあると意識されてきたとする。それでは、首里城を取り囲む蔵風得水の地勢は具体的にはどのようなだろうか。朝鮮の風水の図、首里城を中心にした周辺の模式図を比較してみると、朝鮮の祖宗山と同じように、首里城も後方に弁ヶ嶽を負い、左右に丘陵を持ち、前面に平地流水を臨み、山の中から流れる流水を抱いている。中央の穴部分は生気が最も集中している場所で、ここに城が築城されている。首里城は14～15世紀初期に築城され、その後、約500年にわたって、この王城を中心に琉球の歴史や文化が開花した。先人たちは、この地形の僅かな起伏やひだに自然の生気や神秘を読み取り、自然と精神的な関係を持ち続けながら、城を、そして都を形成してきたと述べている。²¹⁾

ここで、首里城や首里城下町を取り囲む弁ヶ嶽などの四神として想定される地点について、改めて検討してみたい。²²⁾ 筆者をも含む多くの研究者が共通して四神として挙げている弁ヶ嶽は、首里鳥堀町の東端にある泥灰岩の丘で、首里の東の押さえにあたり、古来尊崇を集めてきた。標高は165.7mで那覇市の最高地点であり、東に太平洋、西に東シナ海、眼下に首里・那覇の町並が広がる景勝地でもある。虎瀬・崎山嶽とともに首里の都の風水にかかわるといわれ(球陽尚敬王元年条)、県史跡に指定されている御嶽で、丘上東に大嶽、その南西に小嶽があり、正徳14年(1519)に大嶽の前に石垣と石造門が建立され、国家守護神として崇敬された。1543年には弁ヶ嶽に松を植え、参道を石畳道に改修したことなども記録に残っている。順治元年(1644)からは正月・五月・九月に国王の参詣が行われるようになり、その際には、大嶽の石門内で「三

山の拝み」をすませた後、小嶽の東斜面の手前の石敷の台座に登って、東の久高島と西の中国の北京を遥拝したという。また早魃の際には、たびたび雨乞いもなされた聖地である。この弁ヶ嶽が、玄武に相当するものとして意識されていたか否かはともかくとして、首里城下町建設の重要な地点であったことは断言し得るであろう。

この弁ヶ嶽と東西の関係でペアーをなす地点として、筆者は波上宮を想定したが、その根拠としては、先述のように筆者の設定した四点の交点ということの他に、この波上宮が首里城や弁ヶ嶽からあたかも海中に突出したような地点として見通せることを強調しておきたい。水辺という点を考慮に入れると、朱雀として考えるのが最も適当であるようにも思われるが、これについての確証はない。この波上宮は、那覇市若狭1丁目にある神社で、琉球八社の一つに数えられ、海山寺とも呼ばれていた。「琉球神道記」には波上権現とし、琉球第一大霊現ともいわれた。神託に「我は是日本熊野権現也……」とあったので社殿が建てられたと伝えられる。「おもしろし」（巻10-17, No.527）には国王が吉日を選び、神女である大君・国守りを招いて地鎮祭を行い、国中の人を集めて波上宮を造営したので、神様もお慶びになりきって守って下さるであろうという意味のオモロがある。特に注目すべきは、後述の末吉宮が、波上宮と同様に琉球八社の一つであり、末吉権現とも見えて、熊野権現の伝承を残しているということである。この共通性を考えれば、従来の研究では四神として挙げられていない波上宮と末吉の小丘もしくは末吉宮が、ともに四神であった可能性の傍証ともなり得るのではあるまいか。したがって、玄武と朱雀か否かはともかくとしても、東西の聖なるポイントとしては、前稿でも述べた弁ヶ嶽と波上宮を想定しておきたい。

一方、白虎としてあげられることの多い虎瀬山は、首里赤平町2丁目の東端にある琉球石灰岩の丘陵で、虎頭山、虎頭嶺ともいう。首里城の北方に位置し、西には西森の丘陵、東は御殿山と俗称される丘が続いている。これらの丘陵は、首里城の北側を守る天然の城壁とも想定され、虎瀬山から西森、宝口、唐栄の松山に至るまでは地脈が貫通し、首里城の風水にかかわるともされる（球陽尚泰王10年条）。本来の白虎は西に設定されるのが通例ではあるが、琉球における東を上位とする方位観によれば、弁ヶ嶽を玄武に考えるのが一般的であり、したがって北にある虎瀬山が、その名称の「虎」の字に魅かれて白虎と推定されているように思われる。

ところが、筆者は、先述したように末吉東南方の100m等高線に囲まれた小丘を、四神として想定した。この想定は、主として、首里城下町を取り巻いている四点の交点が首里城下町の中心部に収斂することに拠っているが、この末吉には、社壇（稷）と呼ばれる末吉宮が鎮座している。末吉宮は首里末吉町1丁目にある神社で、琉球八社の一つに数えられ、李鼎元「使琉球記」には蜀楼、「琉球神道記」には末吉権現と見える。尚泰久王代（1454-60）に首里の天界

寺の僧侶が大和での修行中に、熊野に向かって、学問成就せば帰国後に参詣すべしと誓い、帰国して天界寺に住し祈誓を遂げようとしたが許されず、夢に熊野権現が示現して霊地を教えられ、また王にも霊夢があって、この地に社殿が建てられたと伝えられる。このように末吉宮と末吉の丘が、首里城下町北部の宗教的ポイントとして重要視されていたことは疑問の余地がないが、問題は、『中山伝信録』に「亀山は末吉村にあり。土称は末吉山なり。山は中山の北にあり。重岡、環繞す。山半に木亭あり、前後二楹なり。南望すれば海を見る。林木、鬱然たり。第一の勝処たり」と記されていることである。要するに、末吉宮一帯の丘陵を、冊封使録は亀山と称しているわけで、この亀山という呼称が、果たして玄武を意識した呼称であるのか否かが、首里城下町における四神の方角を想定する上で、大きな問題となるわけである。たとえば先に示した蔡温の言葉を素直に読むと、弁ヶ嶽が必ずしも玄武であるとは限らないし、祖宗山であるとも言い切れない。むしろ虎瀬より末吉に至る一連の山林がそれに近いものとして意識されていた可能性も否定はできないのである。前稿では、筆者もまた多くの研究者と同様に、弁ヶ嶽を玄武と想定したが、通例でいう四神の方角通りに、北側にあるこの末吉を亀山の呼称に拠って、玄武であるとする考え方もあるいは成立し得るかもしれない。しかし、従来いわれてきた虎瀬山が筆者の重視する末吉の丘と、先に見たように首里城下町の北側にいわば城壁のように連なる高まりであることもまた、軽視することはできない。とすれば、末吉から虎瀬山にかけての一連の高地が白虎として意識されたことにもなる。

したがって、首里城下町において、四神が意識されていたことは想定できるとしても、具体的に四神を確定することはできない。筆者は前稿で想定したように、玄武はやはり弁ヶ嶽であり、それに対する朱雀は波上宮、白虎は末吉の一帯、青龍は高津嘉山であることに今しばらくはこだわりたいが、その場合、琉球の人達にとって末吉一帯は白虎として意識されてはいたが、中国からの冊封使にとっては、北は玄武であるという認識を払拭できずに亀山の名で呼んだということも、あるいは考えられるかもしれない。また時代によって、四神の方角が変わって認識された、あるいは同時に重複して四神が想定されたというような重層的構造も考えられるかもしれない。この際、首里城の正殿の向きとその正門が南から西に転じたということによる四神の転換、すなわち末吉の玄武が弁ヶ嶽の玄武というように90度時計回りの方向に変えられたという想定も、あるいは成立し得るかもしれない。

このように、いくつかの仮説が考えられるものの、果たして首里城下町において全ての条件を満たし得る四神を設定することが、果たして可能であるのかどうかという疑問も一部では払拭できない。渡邊欣雄氏の、「四神とは、……。古くは中国の方位観や色彩観、そして想像上の動物観に発したもので、本来は都市の立地条件の判断とは関係のないものだった。それが後年

の「風水」知識の発展にもなって、立地の好環境を判断する項目の一部に採用された。土地の判断に採用されると、「四神」に地形条件が加味されるようになる。……。中国ではこれを「四靈説」「四獣説」などと呼んで、風水判断の項目にあげている。が、中国ではたんに都市建設のためだけでなく、家屋や墓地立地の環境判断にも、かような地形上の特徴を動物に見立てて、判断してきたのである。日本ではこの「四神相応」というキーワードが、なにか一人歩きしていて、古代へのロマンをかもしだしているが、風水説にとってはあくまでも理想地形を読み取る視点の一つでしかなく、地形に「四神相応」を読み取っただけでは、都はおろか墓も家屋も造れない。」という見解²³⁾を是とするならば、四神の配置よりは、風水理論の方が優越することになり、首里城下町の場合も四神の配置は、時代や主観などの状況によって、融通無碍な解釈がなされていた可能性を考えるべきかもしれない。

とはいえ、琉球における首里城下町の都市計画において、風水理論が重要な理念として認識されていたことは、確実である。この点に関しては、先述のごとく多くの研究があるが、中でも照屋正賢氏の論文は、風水理論が、首里や那覇の都市計画に大きな影響を与えたことを強調している点で興味深い。

「琉球国旧記」には四つの「地理記」が収録されている。「首里地理記」、「玉陵地理記」、「国廟地理記」、「唐栄地理記」がその四つで、これらは風水理論に基づいて土地の形状を分析し、その吉凶を判定したもので、王都首里、王墓、歴代国王の廟、久米村の立地する土地の風水検分書ということが出来る。照屋氏は、このうちで「首里地理記」を取り上げて、近世琉球の都市計画を論じている。王都首里が風水理論にもっとも合致した都であり、それゆえこれを永久に改建してはならず、「王城風水」を構成している諸要素を常に保全しておかねばならないということは「首里地理記」にも記載されているわけであるが、それでは「王城風水」の保全が首里の都市景観形成にどれほど大きな影響を及ぼしたのか、またその結果として首里にどのような都市景観が現出したのかという問題を、照屋氏は、第二次世界大戦後の那覇市都市計画と対比しながら考察することによって、近世琉球の都市計画を浮き彫りにしていった。

「首里地理記」には、首里に関して、その風水理論における長所があげられている。すなわち城内の設備については(1)国殿の向き、(2)国殿の向きと輦道の走向との微妙なずれ、(3)広福、漏刻、瑞泉、歓会等の諸門が曲がりくねって連なり一直線上にないことが風水理論の「法」にかなっているとされる。王都首里外の山川林樹については、(1)馬齒山、(2)小祿、豊見城方面の嶺々、(3)北谷、読谷山方面の嶺々、(4)(2)(3)の間に介在する三江(那覇港、泊港、安謝港)、(5)西原方面から島尻方面にかけての嶺々があげられ、(1)は城の前に立ちふさがって漏洩の気を遮る役割、(2)(3)は左右からそれぞれ青龍、白虎として城都を鎮護する役割、(4)はその間にあって城

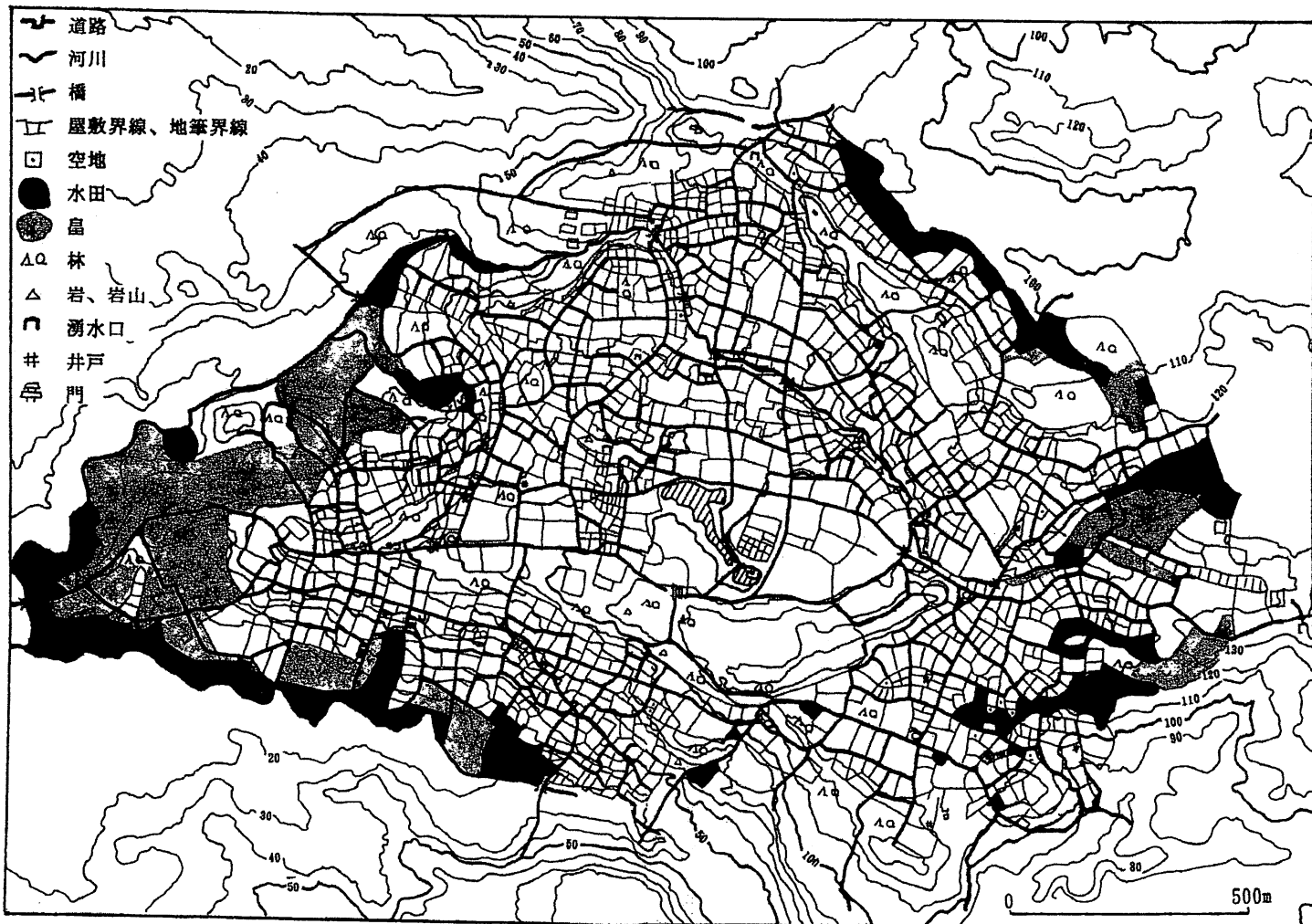
都をめぐる「良佐」としての役割, (5)もまた(2)(3)と同様に後方から城都を鎮護する役割を果たしていると述べられる。さらに王都首里内の山川林樹に関するものとしては, (1)弁ヶ嶽の林樹, (2)虎瀬の林樹, (3)崎山嶽の林樹, (4)遠近の林樹があり城をめぐる「盛気」を扶けているという。したがって、これらの状況を決して変えてはならないということが強調される。このあたりの記述については、先に挙げた島尻氏も同様のことを述べているが、島尻氏は「輦道」を首里城正殿前から歓会門までと捉えるが、照屋氏は「浮道」と限定的に考えるなどの相違もある。

照屋氏は、これらの近世琉球における首里の風水理論と、1956年に認可された第二期那覇市都市計画の基本方針と基本計画の間に多くの共通点のあることに注目している。すなわち、基本計画において掲げられた地形的重点は、那覇港、泊港、漫湖、首里高台、小禄飛行場であったが、これらは「首里地理記」で地形的重点として挙げられた三江（那覇港、泊港、安謝港）、小禄と豊見城の諸峰、王都首里と比べると安謝港を除いてほとんどオーバーラップしているのである。毛文哲と蔡温による地形分析と地形把握は、科学的には限界を有する風水理論に支えられたものであったが、200数十年を経ても、両者はほとんど同様の地形把握を示している。近世の風水理論による王都建設計画は、まさに現代の都市計画に通じる側面を有していたとされる。また続いて照屋氏は「首里地理記」が、実際の首里の都市景観に実効性を有していたことを検証される。それは首里における禁止事項や風水理論に逆らう事物の除去や訂正などによっても理解することができるのであり、「首里地理記」が王都首里の都市景観形成に及ぼした影響は絶大なものであった。かつて柳宗悦が「日本第一の美しい都市」, 「自然と人文のいみじき結縁」, 「真に生きた庭園の都市」, 「人文の華を織りなした名園」と称賛した首里は、「首里地理記」の理念である風水都市の顕在化した姿であり、「首里地理記」こそは、その法的性格、その実効性、また現代の都市計画との類似性等からみて近世琉球の都市計画と呼ぶにふさわしいものであったとされている。²⁴⁾

それでは、首里城下町とその周辺のどのような景観要素が、風水理論に適うものと認識されるに至ったのであろうか。以下、具体的な景観面からの検討を試みることにしたい。

(3) 水田・島の分布と首里城下町

第4図は、「首里古地図」に記載されている水田と島の分布を示したものである。一見すればわかるように、両者はまさしく首里城下町の周縁部に存在している。ただ全ての辺を取り巻いているわけではなく、首里城下町の屋敷地の北東部、東南部、西南部、西北部に見られ、北部と南部には存在しない。北東部では標高90m~120m、東南部では110m~130m、西南部では



第4図 水田・島の分布と首里城下町

10数m~50m, 西北部では10数m~50mの所に、水田と畠が分布している。近接している水田と畠の標高を比較すると、水田の方がやや低い場所に造成されており、また近接している屋敷地よりは水田・畠ともにその標高は低い。したがって、屋敷地は水田や畠よりも高燥の地を志向しており、水田・畠は、高所の屋敷地の周縁部を取り巻いて造成されていたことになる。

それでは、首里城下町を建設する際に、その周囲を水田と畠で囲い込むという発想は存在したのであろうか。もしそのような事実があったとすれば、これらの水田や畠も首里城下町の景観の一要素として認識されていたことになり、風水理論の一環としての意味を議論する必要性があることになるが、どうもそうではないように思われる。水田・畠の欠如している北部と南部は、実は林によって囲まれているとあってよい。もっともこの林については後述するように、水田や畠よりは積極的な意味を持っていると筆者は考えるが、とりあえずここでは、首里城下町の屋敷地の大部分が、水田・畠・林によって囲繞されているという点に注目したい。

首里城下町の屋敷地の大部分が、水田・畠・林によって囲繞されているということは、第4図と次に検討する第5図を重ねあわせてみれば、如実に理解することができる。要するに、「首里古地図」に描かれている屋敷地のうちで、「首里古地図」の範囲外に対して、いわばむき出しのままになっている屋敷地は、ごく一部分しか存在しない。この解釈として、屋敷地を水田・畠・林のいずれかで囲繞するべきであるという原則があったと考えることも、論理的に可能であることは否定できない。この場合は、「首里古地図」に描かれている水田や畠をも含む全ての景観が、「首里城下町」として認識されていることになり、いわば法的にも認可されていることになる。

ところが、「首里古地図」に描かれている範囲は、基本的には屋敷地を含んでいる旧村域をその収録範囲として採用しているものの、一部に村域外に及ぶ地についても水田・畠・林・岩山・丘などを記載している。また逆に屋敷地を含む旧村域のうちでも周辺部の一部を省略している場合も認められる。それゆえ、完全に行政村域のみによって、「首里古地図」の範囲を画定しているわけではない。したがって、「首里古地図」に描かれている範囲が、画然たる「首里城下町」として認識されていたとは言い難いのである。したがって、仮に「首里古地図」が、首里城下町の屋敷地を含んでいる旧村域を描いたいわば村絵図（市街地という点を強調すれば町絵図）の集合体であったとしても、「首里古地図」に描かれている範囲が、それらの村絵図（町絵図）の全てを収録したわけでもなく、屋敷地を含んでいる村のみに限定しているわけでもないことがわかる。それゆえ、首里城下町の周縁部に位置している村が、首里城下町の屋敷地の外側に水田・畠や林を所有しており、その結果として屋敷地を囲繞するかのようにならぬ。要するに、首里城下町の屋敷地を、水田・畠・林によって意

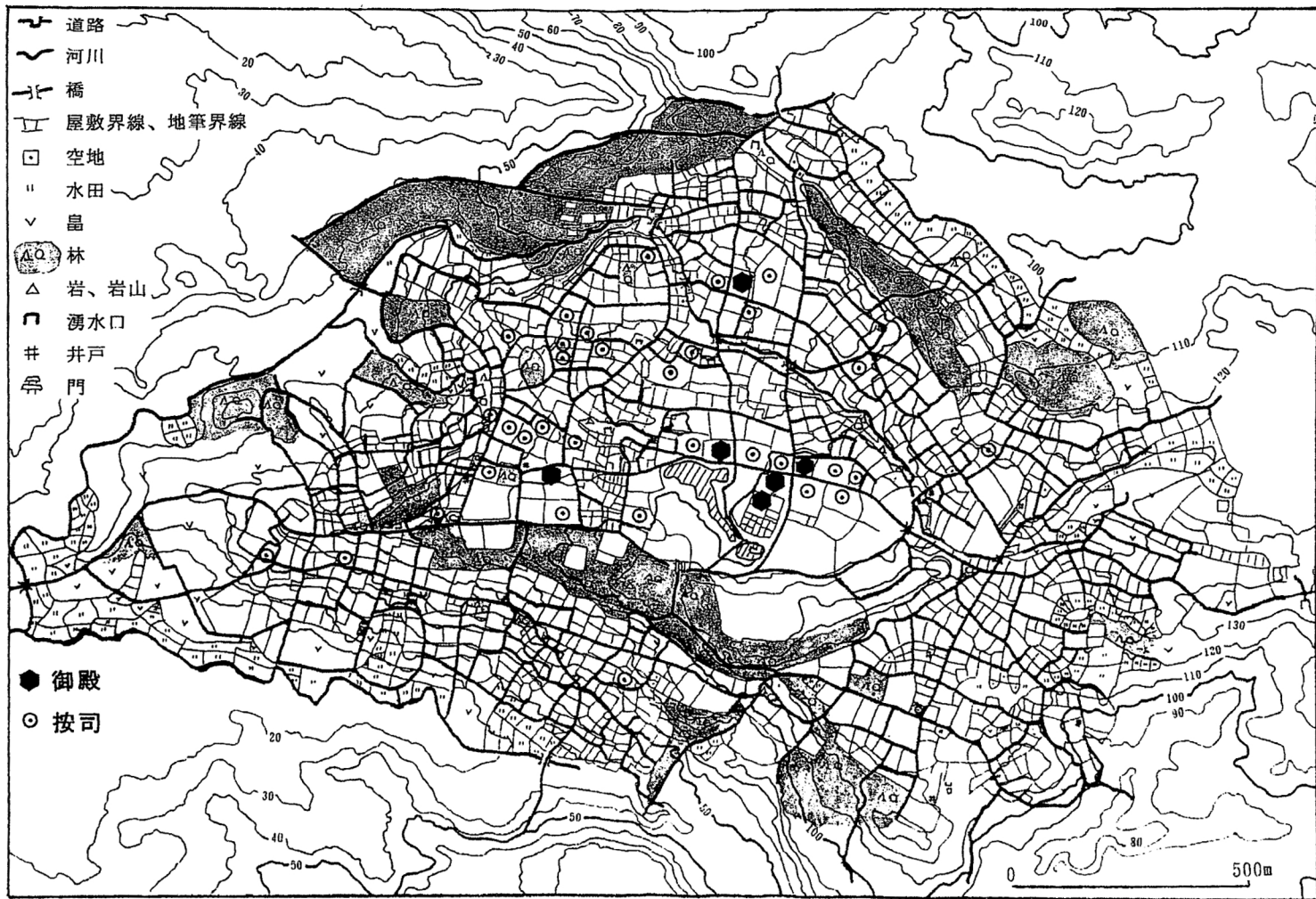
識的に圍繞するという原則は存在しなかったと考えられるわけで、このことは、「首里古地図」に描かれている周縁部の水田・畠や林あるいは岩山や丘などは、「首里古地図」の範囲のみで完結しているのではなく、その周辺部にも連続していたことが、たとえば古い地形図などによってもうかがえることによっても首肯できるのである。

「首里古地図」は、基本的には、「城下絵図」であるがそれは同時に「都市図」という意味をも有している。幕藩体制下における日本の城下町においては数多くの「城下絵図」が作製されたが、その中には、厳密な意味での「城下」のみを描いているものも存在するが、多くは城郭・武家屋敷・町屋・足輕組屋敷・寺町などのいわゆる市街地の周辺に、水田や畑（畠）あるいは河川などの景観が描かれている。これは、市街地を圍繞している景観も「城下町」として認識されていたことを示すのではなく、あくまでも市街地である城下町を浮かび上がらせる目的をもって、付帯的に描き加えたものであると考えられる。時代を無視して言うならば、地理学研究者が、都市景観図や集落景観図を作製する際にも、市街地や宅地のみで図を完結するということは、まず考えられない。ほとんどの場合は、その周辺に市街地や宅地以外の土地利用を記入することによって、その範囲を浮き彫りにするのが通例である。ましてや首里城下町の場合、風水理論に反するという理由で、水田化を禁止している例も見られるのである。したがって、首里城下町の屋敷地が、水田・畠・林によって圍繞されていることに、都市計画としての理念を見出すことはできないと考えたい。

(4) 林の分布と首里城下町

ところが、前節でとりあげた屋敷地以外の景観のうちで、林に関しては、積極的な意味が内包されていたと考えられる。琉球時代の首里城下町において、植樹が推進されたという事実があるからである。

都築晶子氏の研究の大略を述べたい。沖縄では、風水のことをフンシというが、この発音は福建方言のフンツウイに類似しているともいえる。したがって福建方言の転化という憶測が許されるならば、久米村または唐栄の福建一帯からの移住者の存在などから見ても、風水が福州において学ばれて伝えられるに至ったという経路が考えられる。都築氏はこうした中国からの琉球への風水の伝来を、「久米村家譜」（『那覇市史』資料編）や『球陽』（球陽研究会編『球陽』、角川書店、1974年）、「首里家譜」（『那覇市史』資料編）などの史料を詳細に分析・検討することによってたどり、また福州における風水についても述べる。その上で、琉球における風水の知識の実態を解明し、その運営の実際と社会への影響についても説き及んでいる。数ある沖縄における風水に関する研究のうちでも、屈指の研究であるといつてよいと思われるが、本

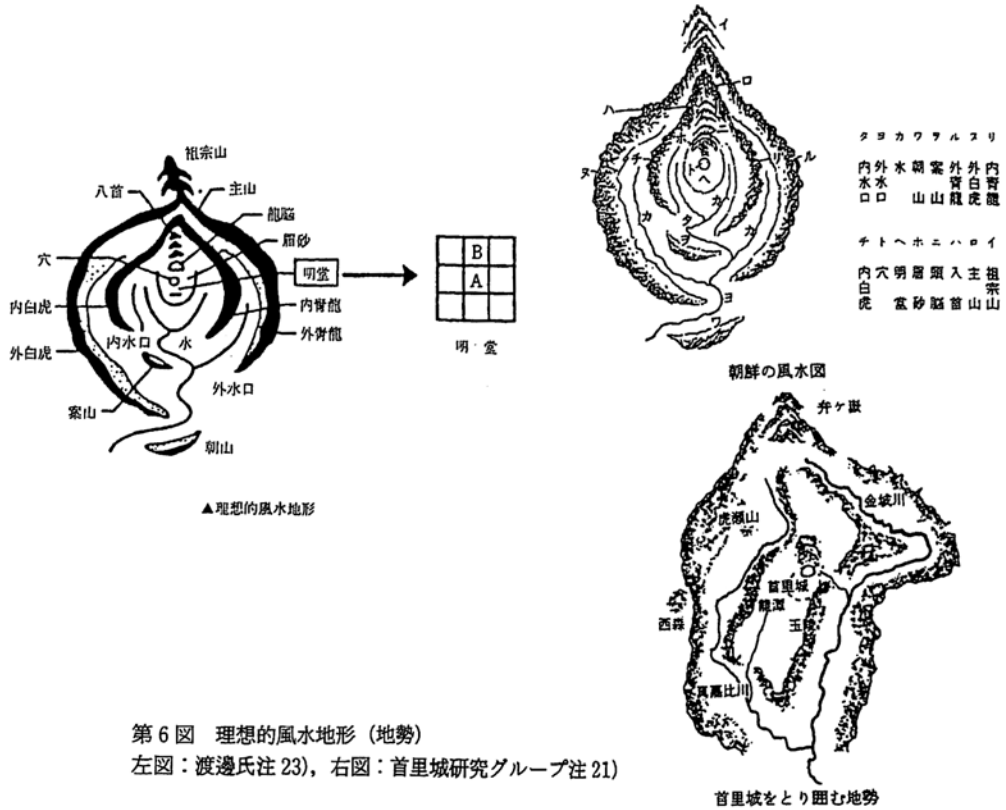


第5図 林の分布と首里城下町

稿で詳しく紹介することはできない。またこの研究中には唐菜である久米村における風水という興味深いテーマについても述べられているが、この点に関しては稿を改めて論ずることを期したい。ただ、ここでは本稿に直接関連するものとして、風水と植樹についての氏の論述を取り上げておきたい。すなわち氏によれば、琉球の風水では、その欠落を補填するために植樹が重視されているとする。首里城、国廟、玉陵の風水論でも、地形の欠落によって生ずる「漏洩之氣」を遮るため樹木を植えるように随所に指示し、「林樹の榮枯は、固より国家の盛衰に係わるなり」とさえ断じられているという。首里城などの風水を論じた蔡温が三司官として植林事業を奨励したことはよく知られており、その理論書というべき「山林真秘」にも、樹を伐つて門を開き、山気を洩通させると山林は病み、やがて枯死してしまうであろうという。蔡温の植林事業には実学的な側面が濃厚ではあるが、そり植林学原理には気の理論や風水理論が深く関連していたことは疑い得ないと論述されているのである。²⁵⁾

この点を検討するために作製したのが、第5図である。「首里古地図」に記された林は、北部と北西部のほぼ全辺、北東部と南部のごく一部ではその縁辺部に存在しているが、それ以外の場所では「首里古地図」の最縁辺部に見られるわけではない。また先に見た水田や畠が、「首里古地図」の最縁辺部を囲繞しているのとはちがって、屋敷地のうちのある限られた地区を囲繞しているように読み取れる。林の分布を標高の点からいえば、北部では90m～60m、北西部では70m～30m、西部では50m～30m、南部では130m～80mと90m～40m、北東部では130m～100m、というある程度の傾斜地にある。すなわち、林の多くは、中位段丘上位面の周縁部と石灰岩堤に見られることになる。したがって、ここでいう「屋敷地のうちのある限られた地区」というのは、中位段丘上位面の比較的平坦な地区で、先に検討した円形や楕円形のプランが卓越している地区ということになる。この、いわば首里城下町の中心地域とでも表現できる地区が、林によって囲まれていることは、かなり重大な意味を物語っているのではないだろうか。

第5図に示した「御殿」と「按司」屋敷の分布と林の分布に注目したい。図中の「御殿」と「按司」屋敷の分布は、吉川博也氏作製の「(各屋敷の)呼称別分布図」に拠っている。氏は「首里古地図」に記載されている「御殿」・「按司」・「親方」・「親(雲)上」・「里之子」・「筑登之」・「子」の屋敷の分布図を作製し、首里城下町の社会階層と空間の関係を検討、次のような結論を導き出された。すなわち、呼称別に首里城からの距離と方角を測定した結果、確かに最高位である「按司」は、距離が中心に近く、方角は首里のメインストリートともいえる綾門大通と城の正門ともいえる歓会門が位置するところに多く見られるという事実はあるが、同時に第四順位の「里之子親雲上」の距離がより中心に近いという例外もある。また第七順位の「筑登之」までそれほど明確ではないが位階が高ければより中心に近いという傾向はある。しかし角度に



第6図 理想的風水地形（地勢）
 左図：渡邊氏注23), 右図：首里城研究グループ注21)

関しては、そのような傾向は見出し得なかったとされる。したがって「首里古地図」では、明確な形での社会秩序空間は見出し得なかったという結論に到達されたわけで、この主要な理由として、当時の位階制度に基づく、社会階層の非固定化と変動をあげておられる。²⁶⁾

ところが、各階層のうちで、「御殿」と「按司」という最高位の屋敷の分布に限っていえば、首里城下町西南部の三箇所の按司屋敷以外は、全て比較的平坦な中位段丘上位面に立地しており、しかもそれらは見事に林によって囲繞されているのである。そのありようは、あたかも重要な中心地区を林によって囲い込むという発想が存在したことを想起させる。ここに見られる林が、全て植樹によるものであるとの確証はないが、首里城下町に内包もしくは近接している状況からして、首里城下町建設以前から自然林として存在していたものがたまたま残されたというよりは、何らかの人工的営為が及んでいたと考えてもそれほどの大過はないであろう。

換言すれば、首里城下町におけるこの林の分布は、風水理論にも整合するものであったことを指摘できるのではないか。理想的風水地形として掲げられる図は、地域と時代によって多様であり、唯一の模範があるわけではないが、本稿では、琉球の風水を論じている首里城研究グ

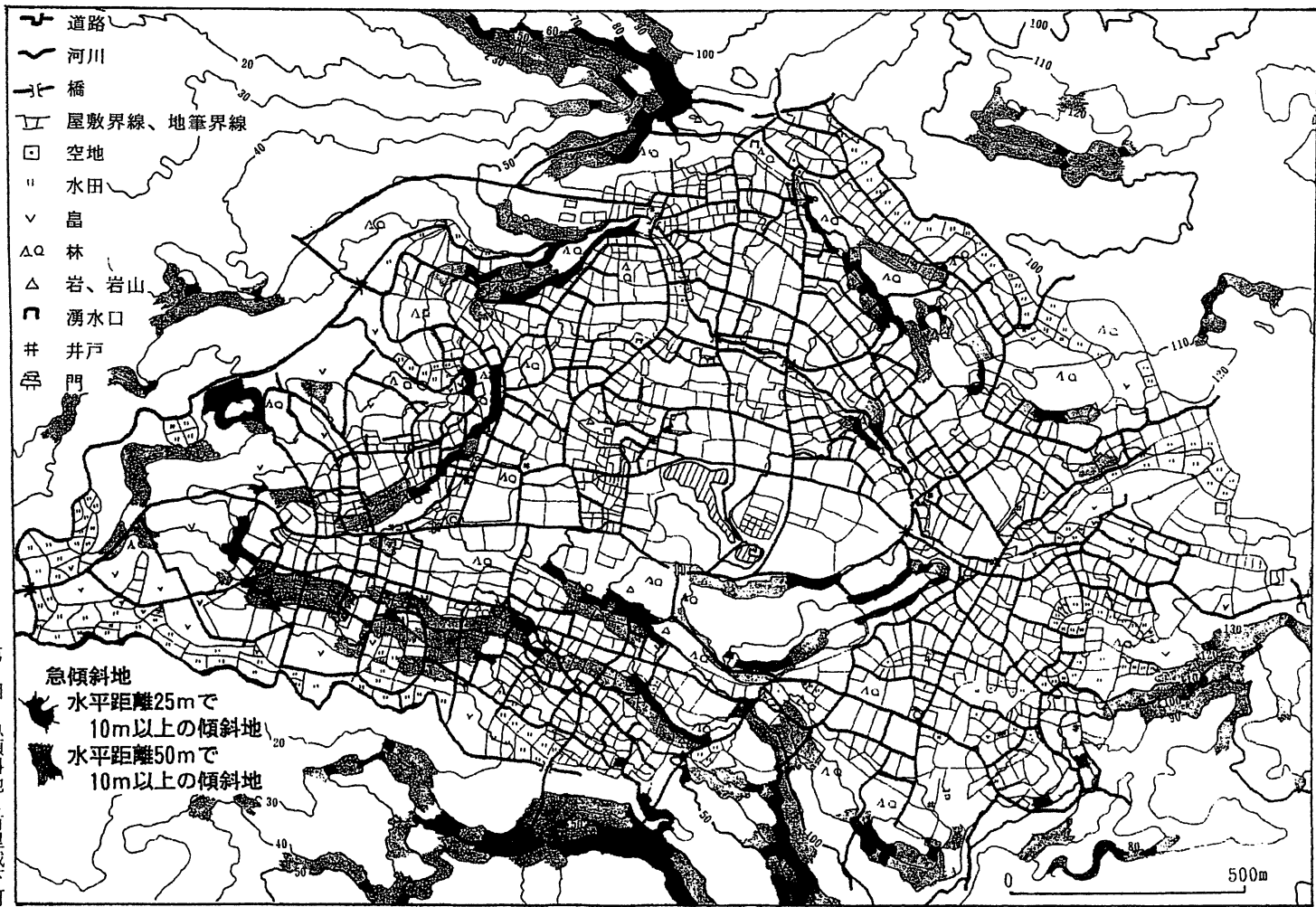
ループと渡邊欣雄²⁷⁾氏の著作に収録されている第6図を例示したい。これらの理想風水の地勢と、第5図に示した林によって囲まれた首里城下町中枢部の状況は、きわめて近似しているとして差し支えないであろう。ただこの場合も、先に論じたように、北の弁ヶ嶽を祖宗山と考えるのか、あるいは末吉をそれに比定するのか、いずれとも決しがたい。したがって、その方角は、北と東のどちらを優先するべきなのかは依然として未解明である。しかし、龍潭や首里城などの中核部が、龍腦、穴、明堂などの気が保たれるべき地点として強く意識されていたであろうことは断言することができるであろう。

とすれば、首里城下町における林の分布は、風水理論に適うように整備された結果のものであり、たとえ自然林を生かすということがあったにせよ、かなりの植林事業によって造成されたものであったと考え得る。この推定が成立するならば、首里城下町においても、やはりある程度の階層制が存在したと考えざるを得ない。周知のように沖縄は台風の襲来のきわめて頻繁な地域である。それゆえ、防風林としての効果は、当然のことながら琉球王朝の時代にも意識されていたであろう。蔡温の実学的植林事業は、まさにこのことを明確に意識下においたものであったであろうし、またそれは同時に風水の理論にも適うものであったのではないか。

(5) 急傾斜地の分布と首里城下町

首里城下町において理想的風水の地勢が意識されていたことは、文字通りその地勢によっても首肯することができる。第7図は、首里城下町とその周辺の地域における急傾斜地を示したものである。先述のように、この地域における急傾斜地は、小起伏丘陵の谷壁斜面と石灰岩堤の周囲に見られるが、ここではそれらの地形分類はさておいて、単純に等高線の間隔の狭い部分に注目したい。

具体的には、水平距離25mで標高が10m以上の傾斜を示す箇所と、水平距離50mで標高が10m以上の傾斜を示す箇所を図示した。この1/2.5や1/5という勾配は、あくまでも一応ラウンドな数値を目安にただけで、何らかの基準になっているわけではない。しかし、この1/2.5や1/5という勾配は、一般的にいつて建築物を建てるという条件としては、きわめて急傾斜であるということになろう。現に、首里城西南部の首里金城町などの急傾斜地以外においては、ごく一部の例外を除いて屋敷は立地していない。関連していえば、先の林によって囲まれた首里城下町の中核部には、首里城の周縁と真嘉比川に沿った一部にしか、この急傾斜地は存在していない。またこれほどの勾配を有する地点では、建築物のみならず、道路を敷設する際にもかなりの障害となるはずで、首里金城町などの石畳の道路の存在は、図示したような典型的な急傾斜地であるからこそのように思われる。



第7図 急傾斜地と首里城下町

注目すべきは、図示した急傾斜地が帯状に首里城下町を囲んでいるという状況である。もちろん囲んでいるという表現は、これらの急傾斜地が自然的なものであって、基本的には人工的なものではない以上、不適切な表現であることはいうまでもない。正確にいうならば、これらの急傾斜地によって取り囲まれている地区に、首里城下町が建設されているというべきである。したがって、これらの急傾斜地は結果として、首里城下町を囲繞するかのよう存在しているわけであるが、そのことを十分に考慮に入れた上でもなお、「首里城下町は急傾斜地の帯によって囲繞されている」という表現を採用したくなるほどに、屋敷地の範囲と整合した分布を示しているのである。

しかも、この急傾斜地の帯は、一筋の帯ではない。最も内側の急傾斜地の帯は、何度となく繰り返してきた中位段丘上位面すなわち円形や楕円形の多核的なユニットが広がっている地区、換言すれば人工の手も及んだと考えられる林によって囲繞され、御殿や按司屋敷の立地がその内部にほとんど限定されていることなどから首里城下町の中心部と推定し得る地区の周縁に連なっている。また、総体的に見れば、その外側の急傾斜地の帯は、首里城下町全体（厳密には、「首里古地図」に描かれている全範囲）をすっぽりと内包するかのよう連なっている。要するに、完全に二重であるとは言い切れないにしても、ほぼ二重の急傾斜地の帯が、首里城下町の周囲に認められるということになる。

先に掲げた第6図にたちかえりたい。そこには外側の外青龍と外白虎に連なり外水口に口を開けている山並みと、内側の内青龍と内白虎に連なり内水口に開放している山並みの二重の山並みが描かれている。もとより筆者が示した急傾斜地の帯は、山脈ではないが、急傾斜によって山並みを意識させる存在であったと想定してもさほどの誤りではないであろう。とすれば、首里城下町におけるこれらの二重に近い帯は、理想風水の地勢の図にきわめて類似していることが読み取れるのである。先述したように、これらの急傾斜地の帯は、自然的なものであるから、首里城下町の建設の際に、このような状況が造りだされたわけではない。しかし、このような条件に風水理論に適うという読み替えがなされたという以上に、首里城下町建設時に、このような地勢がより積極的に評価されたと考えてよいのではないか。

5 むすびにかえて……首里城下町の基本理念

以上、「首里古地図」を基にして復原した首里城下町を、主として地形や諸景観要素から検討した結果、都市計画の実態やその基本理念についてのいくつかの仮説を提示することができた。もちろんこれらは、あくまでもいわば表層的な検討であると言わざるを得ない。時間的にも琉球王朝時代を一括して述べていて、数世紀にわたる時間の流れの中における都市計画の変遷と

その面期や、それらの深層に潜む諸々の事実を詳細に検証する必要があることは言うまでもない。しかし、いままでの検討でいちおう判明したことを繰り返して列記すれば、以下のようになる。

- ・まず、首里城は、小高い丘をなしている石灰岩堤上に立地していて、城の独立性や戦略性の点からも、きわめて理想的な地を選定していた。しかし、その他の石灰岩堤の地形は、大略的には屋敷の空白地帯となっていて、その多くは林によって占められていた。
- ・これに対して、石灰岩堤よりやや標高的に低い石灰岩台地の中位段丘上位面は、城下町のうちで最もその面積が広く、その大部分は屋敷地となっていた。またこの中位段丘上位面に比べて、首里城南西部と首里城北西部は小起伏丘陵の谷壁斜面に立地していて、その傾斜はきわめて強い。したがって、首里城と屋敷地の空白地である小高い石灰岩堤、大部分が緩傾斜面である中位段丘上位面の屋敷地、急傾斜地である小起伏丘陵谷壁斜面に建設された屋敷地という図式が成立しそうである。
- ・首里城下町に見られる地割の形態は、円形もしくは楕円形の屋敷地の地区、楕円形ではあるが全体が屋敷地ではなく首里城下町の縁辺部でその内部に水田や林を含んでいる地区、方形の地区の三種類に分類できる。
- ・これらのうちで、円形（楕円形）のほとんどは、地形的条件によって生じたものと考えられ、各々の多核的プランの主たる成因は地形的単元に帰してよい。また小起伏丘陵の谷壁斜面に見られる方形も、地形的条件にその要因が求められることは同様であるが、この急傾斜地においては、円形のプランを造成することは、きわめて困難なことであり、ある意味でその方形プランは必然であったといえる。
- ・中位段丘上位面においては、円形・方形のいずれを造ることも可能であったことを考慮すれば、全体としては円形を志向するという原理が存在した可能性が強い。
- ・この円形志向は、中国の影響や風水思想によるものとも考えられる。また直進するといわれる悪霊（邪気）を排除する目的や良い「気」の流出を防止するという目的にとっては、円形の方が方形よりも適切であったし、それゆえ首里城下町において長距離を見通し得る街路がほとんど存在しないという事実は、幕藩体制下の城下町における軍事的目的による「遠見遮断」とは、異なったものとして考えるべきであろう。
- ・平等や村が、各々のユニットを成した地区を分断している状況からして、首里城下町の建設及び整備当時から画然たる行政地域として存在していたとは考えにくい。首里城下町の本格的な建設や整備が実施されたといわれる尚真王の時代に、按司の首里への分住・集居策が相当程度に実施され、首里城下町の骨格は、この頃にはすでに形成され、多核的な街路や街区

も、かなりの地区で顕在化していた。その後、平等や村が行政的な枠として設定されていったと推定するのが妥当であると思われる。

- ・首里城下町においても「横一列型」のブロックが存在しているが、「縦一列型」や「横二列型」あるいは「田の字型」などの街区も認められる。これらの混在は、首里城下町の成立年代の古さを示す可能性が強く、「横一列型」が首里城下町の中心部ではなく、中位段丘上位面の周縁部に顕著に認められることも注目できる。
- ・首里城下町において、四神が意識されていたことは確実であろうが、具体的に四神の設定を確定するには、なお検討が必要である。筆者は一応、玄武＝弁ヶ嶽、朱雀＝波上宮、白虎＝末吉の一带、青龍＝高津嘉山であると想定しているが、琉球の人達にとっての四神と中国からの冊封使にとっての四神の相違、あるいは時代による四神の方角の変遷、さらには重複して認識されるというような重層的構造も想定できるかもしれない。ただ、四神の配置よりは、風水理論の方が優越していた蓋然性が高く、首里城下町の場合も四神の配置は、あくまでも風水理論の枠があつてこそのものであつた。それゆえ四神は、時代や主観などの状況によって、融通無碍な解釈がなされていたと現段階では考えておきたい。
- ・首里城下町の諸景観要素のうち、屋敷地の大部分が、水田・畠・林によって囲繞されている事実は、市街地である城下町を、「首里古地図」の上で、浮かび上がらせる目的で描き加えられた結果と考えるべきで、このことに都市計画としての特段の理念を見出すことはできない。
- ・水田や畠に対して、林に関しては、積極的な意味が内包されていたと考えられる。いわば首里城下町の中心地域とでも表現できる地区は、林によって囲まれており、「御殿」と「按司」という最高位の屋敷は、ほぼこの地区に限定されている。このことは首里城下町における階層制を想起させるものであるし、風水理論にも整合するものであつた。またそれは、植林事業によって造成されたものであつたと考えられる。
- ・首里城下町において理想的風水の地勢が意識されていたことは、各種の史料のみならず、首里城下町を取り巻く現実の地形からも確実である。すなわち、ほぼ二重の急傾斜地の帯が、首里城下町の周囲に認められ、それは、外側の外青龍、外白虎、外水口に口を開ける山並みと、内側の内青龍、内白虎、内水口に開放する山並みの二重の山並みという理想的風水の地勢に見事に整合している。したがって、首里城下町建設時に、このような地勢が積極的に評価されたと考えられる。

注および参考文献

- 1) 土本俊和「首里の町と首里城」、高橋康夫ほか編『図集 日本都市史』所収、東京大学出版会、1993年9月10日、p.184・185。池野 茂「沖縄の都市」、豊田 武ほか編『講座 日本の封建都市(3)』所収、文一総合出版、1981年、p.631-653。同「首里」、藤岡謙二郎編『城下町とその変貌』所収、柳原書店、1983年10月20日、p.446-460、など前稿で参照したほとんどの文献でも「首里城下町」という表現を使用している。したがって本稿でも同様の表現を使用する。
- 2) 嘉手納宗徳作図・解説、「首里古地図(1700年ごろ)」p.64-65、「王都首里の町並み分布」p.133、『沖縄歴史地図』所収、柏書房、1983年4月20日
- 3) 吉川博也「田名・吉川版」首里古地図の作成について、吉川博也『那覇の空間構造 沖縄らしさを求めて』、沖縄タイムス社、1989年6月30日、p.214-224
- 4) 福島清ほか「首里古地図」と町並み(首里城下町復原模型作製のための研究会資料でA4版10pのもの)、1997年10月9日。また、福島清「古地図からみる首里の町」、『首里城友の会会報』No.22などもある。
- 5) 那覇市「1:2500 都市計画図」、那覇市、1985年3月作成・1995年12月修正(1993年8月撮影空中写真、1995年現地調査)
- 6) 那覇市文化局歴史資料室「那覇市旧跡・歴史的地名地図」(1:6000、那覇・首里・真和志・小禄地区、4葉)、1998年3月
- 7) 那覇市史編集室「旧首里の歴史・民俗地図」(1:8500)、1978年12月。
- 8) 財団法人海洋博覧会記念公園管理財団「首里城周辺史跡マップ」、1997年3月31日、p.1-104
- 9) 那覇市文化局歴史資料室所蔵の「戦前の民俗地図」。この一連の地図は、第二次世界大戦前(明治・大正・昭和初期)のいわば首里市街地住宅地図とでも称すべき地図である。当時から現地に在住し続けておられた方の記憶によって記録・作製されたもの。
- 10) 高橋誠一「首里古地図」と首里城下町の復原、『東西学術研究所紀要』第33輯、関西大学東西学術研究所、2000年3月31日、p.75-107
 なお、この前稿で、池野茂氏の研究にしたがって「ペリー艦隊の奥地踏査隊もわずかに首里の外周を垣間見ただけであった。薩摩藩さえも那覇には「御仮屋」と称する政務所をおきはしたものの、対中国政策もあって、首里にはその影響を直接的に及ぼすことはなかった。中国からの冊封使のみが王城の首里に足を踏み入れるにすぎなかったのである。」とした点について、田名真之氏から、ペリー一行は首里城を強行訪問し城内の北殿で歓迎の宴を催されていること、また薩摩の役人はしばしば城内に招かれていることを教示いただき、あわせて前稿78ページで真境名延興としたのは安興の誤りであることもご指摘いただいた。またこの点に関連する研究として前稿成稿後に、南出真助氏による「異文化受容空間としての港…一九世紀の那覇港点描…」、追手門学院大学アジア文化研究会「他文化を受容するアジア」所収、和泉書院、2000年3月30日、p.165-184が発表されたことも付記しておきたい。
 さらに前稿公刊後に、伊従勉氏による「首里古地図」の製作精度—琉球における測量術の発達と首里絵図—、『地図と歴史空間—足利健亮先生追悼論文集—』所収、大明堂、2000年8月10日、p.403-416が公刊された。「首里古地図」の製作を研究する上できわめて貴重なもので、あわせて参照されたい。
- 11) 目崎茂和・河名俊男・木庭元晴・渡久地健「地形分類調査」、『土地分類調査 沖縄本島中南部地域 「那覇」・「沖縄市南部」・「糸満」・「久高島」 5万分の1』、国土調査・沖縄県、1983年、p.7-14及び地形分類図(沖縄中南部)。木庭元晴「琉球層群と海岸段丘」、『第四紀研究』第18巻第4号、1980年5月、p.189-208。ただし、木庭氏はこの論文中の年代決定に関しては、以下の論文で、中位段丘上位面を約20万年前というように訂正しておられる。M. Koba et al.: ESR AGES OF PLEISTOCENE CORAL REEF LIMESTONES IN THE RYUKYU ISLAND, JAPAN, ESR Dating and Dosimetry (IONICS,

Tokyo, 1985), pp. 93-104.

- 12) 沖縄県教育庁文化課「首里城跡 歓会門・久慶門内側地域の復元整備にかかる遺構調査」, 「第II章 遺跡の位置及び環境」, 緑林堂出版, 1988年3月30日, p. 10-13
- 13) 前掲5)
- 14) 吉川博也「聖なる首里, 俗なる那覇」, 吉川博也『那覇の空間構造 沖縄らしさを求めて』, 沖縄タイムス社, 1989年6月30日, p. 138-170
- 15) 首里の町の概要については, いずれも「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』, 角川書店, 1986年7月8日を参照した。
- 16) 前掲8)
- 17) 坂本磐雄「沖縄の集落構成の特長」, 『文明のクロスロード MUSEUM KYUSHU』第10巻第2号, 博物館等建設推進九州会議, 1991年3月31日, p. 34-39
- 18) 前掲14)
- 19) 目崎茂和「風水・風土・水土」, 窪 徳忠編『沖縄の風水』所収, 平河出版社, 1990年9月25日, p. 59-80。同「三重の呪縛から」, 『三重民俗研究会会報』No.29, 2000年3月31日, p. 1-21
- 20) 島尻勝太郎「沖縄の風水思想」, 窪 徳忠編『沖縄の風水』所収, 平河出版社, 1990年9月25日, p. 3-13
- 21) 首里城研究グループ『首里城入門 その建築と歴史』, ひるぎ社, 1997年7月15日, p. 1-191
- 22) 弁ヶ嶽, 波上宮, 末吉などについての概略は, 前掲15)を参照した。
- 23) 渡邊欣雄「風水 気の景観地理学」, 人文書院, 1994年1月20日, p. 1-294
- 24) 照屋正賢「近世琉球の都市計画」, 窪 徳忠編『沖縄の風水』所収, 平河出版社, 1990年9月25日, p. 191-232
- 25) 都築晶子「近世沖縄における風水の受容とその展開」, 窪 徳忠編『沖縄の風水』所収, 平河出版社, 1990年9月25日, p. 15-58
- 26) 前掲14)
- 27) 前掲21), 前掲23)

[附記]

前稿の成稿後に, 関西大学東西学術研究所の研究例会(2000年3月15日)においてその骨子を報告した(『関西大学東西学術研究所々報』第70号に要旨を掲載, 2000年3月31日)。その際, 関西大学文学部の橋本征治教授から, 首里城下町の多核的プランについて, その起伏を検討してはどうかとの示唆を得た。本稿を成すにあたってきわめて有益な示唆となった。また遺漏を恐れてそのお名前は省略するが, 研究例会の席上で, 四神の配置と方角, 龍潭の意味, 絵画史料の有効性, 各地区の造成年代などに関する多様なご意見を頂戴した。本稿ではその一部しか消化し得なかったが, 後日を期したい。さらに, 首里台地の地形に関しては, 関西大学文学部の木庭元晴教授から貴重な資料の提供と懇切な教示を得たし, 那覇市歴史資料室長の田名真之氏からは注10)に記したような教示を得た。記して深甚なる謝意を表したい。

Urban Planning and Fundamental Principles of *Shuri* Castle Town in *Ryukyu* Dynasty

Seiichi Takahashi

The urban planning and fundamental principles of *Shuri* castle town, the capital of *Ryukyu* Dynasty, are discussed by restoring its landscape based on the 'old map of *Shuri*'. The following facts are identified.

- *Shuri* Castle was built on a limestone hill, and ideal location from the viewpoint of independence and war strategies. On the other hand, most of the residences were built on the upper middle terrace at a lower height.
- There were three different types of zoning in *Shuri* Castle Town. There were the circular or elliptic residential districts, elliptic districts at the margin of *Shuri* Castle Town which included not only residences but also rice paddies and forests, and the square districts. Most of the circular (or elliptic) districts which constitute units of multiple centers were formed according to the topography of the locations. Also the circular plans were preferred to the square ones. It is considered to be the influence of urban planning or the traditional *Fusui* Principle of China.
- The fact that the centers of *Shuri* castle town was surrounded by afforested area is the evidence that they enthusiastically adopted the *Fusui* Principle, and that they assigned different districts to different social classes. It can also be assumed that the *Fusui* Principle was the fundamental principle of *Shuri* castle town based on various records and also from the double steep sloped areas surrounding the town.